

仙台市文化財調査報告書第186集

# 昭和北遺跡

－発掘調査報告書－

1994年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第186集

# 昭和北遺跡

## —発掘調査報告書—

1994年3月

仙台市教育委員会

## 序 文

当市が政令指定都市となりはや5年が経過いたしました。この間にも都市計画道路建設や地下鉄延伸などの交通体系の整備、学校や各種センターなど公共施設の建設、さらに土地基盤整備など様々な市民のニーズに応じた事業を数多く進めてまいりました。しかしながらこうした開発の陰で多くの遺跡が破壊されていったこともまた事実であります。

私たち人類の過去の歩みが凝縮された文化財の保護活動につきましては、関係諸機関との協議を重ねた上、いくらかでも保存できるよう心掛けておりますが、歴史的意義が認識され、保存の運びとなりました山田上ノ台遺跡や富沢遺跡のような例は極めて希で、その多くは記録の保存を目的とした発掘調査に委ねられるのが現状です。そのようななか行われました昭和北遺跡の調査におきましては、小規模な調査にもかかわらず大きな成果をあげ、これまで資料の蓄積の少なかった当地区の歴史解明の一助となるものと自負されます。

近年、一時の開発ブームが社会に様々な弊害をもたらしたことの反省から、今後は文化、福祉活動等における市民や行政の役割が再び重視されるようになってまいりました。先人の知恵を現在のくらしのみならず、子供達の未来への遺しるべとして生かすため、私たちは文化財の保護、活用を計る義務を負っており、ここに市民の皆様のさらなるご理解、ご協力が望まれるものであります。

最後になりましたが、調査にあたりご助力いただきました関係各位に感謝申し上げる次第であります。

平成6年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

## 例　　言

1. 本報告書は平成3年度に調査した、仙台市市道拡幅工事に伴う昭和北遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
2. 本報告書を作成するにあたり、遺物・図面の整理、および執筆、編集は佐藤淳が担当した。
3. 調査・整理に関する記録及び出土遺物は仙台市教育委員会が保管している。
4. 今回の調査の成果を受け、平成4年度に昭和北遺跡の範囲を、調査区とした道路部分より北側へ拡大した。

## 凡　　例

1. 「周辺の遺跡図」は、国土地理院作成の『仙台東北部・東南部』1:25,000を使用した。
2. 「調査区位置図」は、仙台市都市計画課作成の『都市計画図』1:2,500を使用した。
3. 土層註記などに記載している土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原:1976)を使用した。
4. 調査におけるグリッド軸は道路に沿った任意方向のものだが、「調査区設定図」には平面直角座標第X系による国土座標も同時に記している。
5. 遺構図の表示
  - ・遺構名については以下のような略号を使用し、各々の確認順に番号を付していった。  
SI—堅穴住居跡（以後住居跡） SK—土坑 SD—溝跡 P—小穴或いは柱穴
  - ・遺構内の傾斜面は「π」で表現し、搅乱などについては「?」で表現した。
  - ・層位名は基本層位をローマ数字、遺構内層位については算用数字で記し、その中でも細分されるものには、アルファベットの小文字や、「.」を枝番として付している。
  - ・遺構図の縮尺は調査時1/10・1/20で作成したものを、整理時さらに1/2・1/3の縮尺で収録している。
  - ・断面図中の斜線のスクリントーンは遺構掘込み層（地山層）を表現している。
  - ・ピットの土層註記はIV-4にまとめて記している。
6. 遺物図の表示
  - ・遺物図は原寸で作成したものを、1/2・1/3の縮尺で収録している。
  - ・土師器の朱彩は網点のスクリントーンで表現している。
7. 本文中の遺物にかかわる数字は遺物登録NO或いは掲載図版NOを記している。
8. 石製品の石材鑑定は東北大学教養部教授　蟹澤聰史氏にお願いした。

## 本文目次

序 文	
例言・凡例	
本文目次	
図・写真目次	
I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査要項	1
II. 遺跡の概要	3
1. 位置と地形	3
2. 周辺の遺跡	3
III. 調査の概要	5
1. 調査の方法	5
2. 基本層位	6
IV. 発見遺構と出土遺物	8
1. 住居跡とその出土遺物	8
2. 土坑とその出土遺物	21
3. 溝跡・溝状遺構	21
4. ピット	25
5. 遺構外からの出土遺物	26
V. 考 察	29
1. 出土遺物について	29
(1) 古墳時代の土器	29
(2) 古代の土器	37
2. 遺構の年代	37
VI. まとめ	40

## 図・写真目次

### 図目次

第1図 造跡の位置と周辺の造跡	2	第14図 SI 5 住居跡	19
第2図 調査区位置図	4	第15図 SI 5 住居跡出土遺物	20
第3図 調査区設定図	4	第16図 SI 6 住居跡	20
第4図 造構配置図	7	第17図 SK 1 土坑、P 4	21
第5図 SI 1 住居跡	8	第18図 SD 1 溝跡、P 1・2	22
第6図 SI 1 住居跡出土遺物	9	第19図 SD 2 溝跡、P 6・7	23
第7図 SI 2 住居跡、P 3	11	第20図 SD 3 溝跡	23
第8図 SI 2 住居跡出土遺物（1）	12	第21図 溝状造構、P 5	24
第9図 SI 2 住居跡出土遺物（2）	13	第22図 ピット	25
第10図 SI 3 住居跡、P 9・10	15	第23図 造構外出土遺物（1）	26
第11図 SI 3 住居跡出土遺物	16	第24図 造構外出土遺物（2）	27
第12図 SI 4 住居跡	17	第25図 造構外出土遺物（3）	28
第13図 SI 4 住居跡出土遺物	18		

### 写真目次

写真 1 昭和北道路空中写真	43	写真24 SK 1 土坑完掘状況	47
写真 2 調査前状況	43	写真25 SK 1 上坑断面状況	47
写真 3 SI 1 住居跡断面状況	43	写真26 SD 1 溝跡完掘状況	47
写真 4 SI 1 住居跡遺物出土状況	43	写真27 SD 1 溝跡断面状況	47
写真 5 SI 1 住居跡完掘状況	43	写真28 SD 2 溝跡確認状況	47
写真 6 SI 2 住居跡床面遺物出土状況	44	写真29 SD 2 溝跡断面状況	47
写真 7 SI 2 住居跡断面状況	44	写真30 SD 3 溝跡断面状況	47
写真 8 SI 2 住居跡堀り方完掘状況	44	写真31 溝状造構①～④確認状況	48
写真 9 SI 3 a 住居跡断面状況	44	写真32 溝状造構①～④完掘状況	48
写真10 SI 3 a 住居跡確認状況	44	写真33 溝状造構⑤完掘状況	48
写真11 SI 3 a 住居跡完掘状況	44	写真34 溝状造構②・③断面状況	48
写真12 SI 3 b 住居跡完掘状況	44	写真35 溝状造構①断面状況	48
写真13 SI 4 住居跡確認状況	45	写真36 調査風景	48
写真14 SI 4 住居跡床面状況	45	写真37 SI 2 住居跡出土土器	49
写真15 SI 4 住居跡土坑 2 確認状況	45	写真38 SI 1 住居跡出土遺物	49
写真16 SI 4 住居跡土坑 2 断面状況	45	写真39 SI 2 住居跡出土遺物（1）	50
写真17 SI 5 住居跡確認状況	45	写真40 SI 2 住居跡出土遺物（2）	51
写真18 SI 5 住居跡完掘状況	46	写真41 出土遺物（1）	52
写真19 SI 5 住居跡様道部断面状況	46	写真42 出土遺物（2）	53
写真20 SI 5 住居跡様道部完掘状況	46	写真43 出土遺物（3）	53
写真21 SI 5 住居跡断面状況	46	写真44 出土遺物（4）	54
写真22 SI 6 住居跡断面状況	46	写真45 出土遺物（5）	54
写真23 SI 6 住居跡完掘状況	46		

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経緯

仙台市太白区四郎丸字昭和北地内において仙台市市道の拡幅計画が仙台市太白区建設部建設課から提示された。国道4号線バイパスより東に位置する袋原・四郎丸地区は以前からの住宅地に加えて、ここ数年来、規模の大きい宅地造成や多くの小規模開発が行われてきた地区である。しかしながら国道の西に位置する西中田・柳生地区などに比べて、行政主導の区画整理や道路の建設など、都市計画の不備から交通の面で立遅れた地区となっていた。

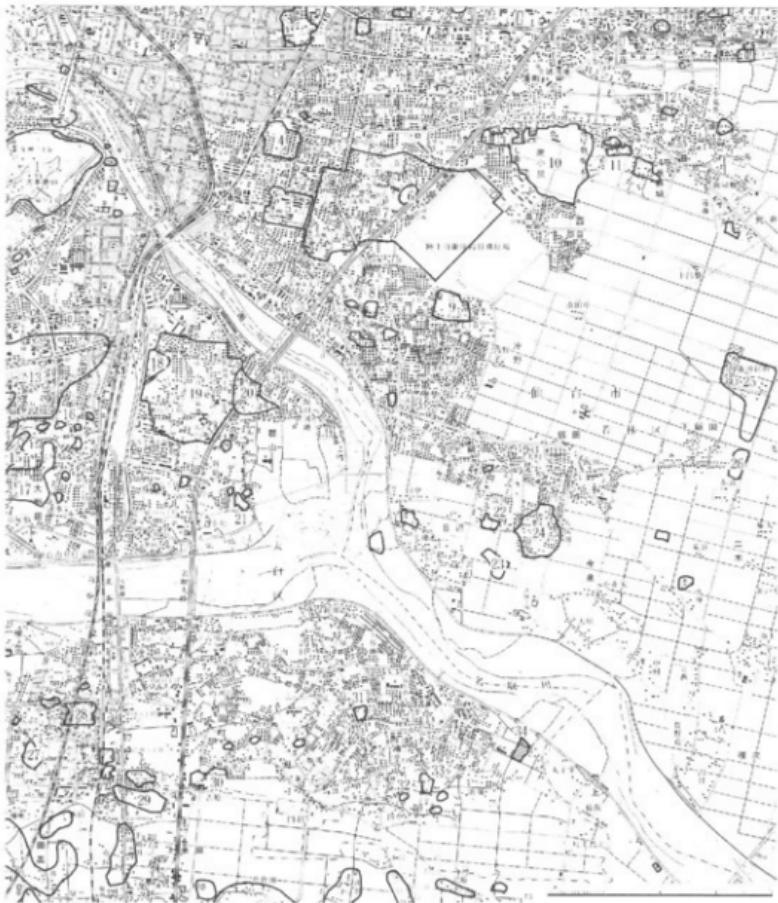
この四郎丸地区の中でも東に位置し、名取市と接する昭和北地内においても、東の開上地区への道路が未整備なため、バイパスから海岸部へは南をまわらなければならない。東四郎丸小学校の東に位置する工事予定区は、幅員3m程のため車の通行に支障をきたし、遺跡の北辺約125mを含む道路の拡幅工事が望まれるところであった。

建設課との事前協議を経て、文化財調査第一係は、平成3年5月27日に遺構の有無を確認する試掘調査を行った。調査は遺跡の北辺にある既存の道路の南側拡幅部に沿って、約140mの直線上に7か所、計約62m<sup>2</sup>の試掘トレンチを設け、上層を重機により掘削した後、遺構が確認されるとみられる黄褐色層上で精査を行った。この結果、西端部より東に約30m<sup>2</sup>の範囲において溝状のプランなどが確認された他、遺物を包含する層も確認されたことにより、少なくともこの範囲において本調査の必要性があるものとの認識がなされた。

以上の成果を踏まえ、同年12月に記録保存のための発掘調査を行った。

## 2. 調査要項

調査名称	昭和北遺跡（しょうわきたいせき）（宮城県遺跡地名登載番号 01282）（仙台市文化財登録番号C-210）
調査名称	昭和北遺跡発掘調査（仙台市市道拡幅に伴う調査）
調査地	仙台市太白区四郎丸字昭和北地内
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財調査第一係 担当職員 神成浩志・佐藤 淳
調査期間	平成3年12月10日～12月24日
調査面積	約57m <sup>2</sup> （対象面積：約250m <sup>2</sup> ）
調査参加者	伊藤貞子・伊藤幸子・植野幸子・遠藤いな子・太田君子・西條裕子・佐藤とき子 清水けい子・鈴木幸子・関谷栄子・高橋たづよ・富永美輪子・三浦つよの 森ミヨノ・吉田りつ子・我妻美代子（整理も含む）
調査協力	東四郎丸小学校



遺跡名	種別	立地	年代	遺跡名	種別	立地	年代
1 佐々崎遺跡	墳	丘陵	西北側一帯	18 西古都遺跡	集落	自然堤防	绳文・弥生・古墳
2 爰宕山櫛穴群	古墳	丘陵	古墳	19 那山遺跡	石	自然堤防	古墳・奈良
3 犬塚古墳群	古墳	自然堤防	古墳	20 北日高遺跡	城	自然堤防	绳文・弥生・古墳・平安
4 東横田遺跡	生糞跡	河谷	绳文・古代・近鉄	21 欠ノ上遺跡	集落	自然堤防	古墳・奈良・平安
5 芝林駒跡	廻	河谷	西濃・江戸	22 高田遺跡	集落	自然堤防	奈良・平安
6 武光塚古墳	古墳	河谷	古墳	23 西日高遺跡	集落	自然堤防	弥生・中世
7 南小原遺跡	集落	河谷	绳文・古墳	24 今垂遺跡	城	自然堤防	绳文・古墳
8 神櫛遺跡	集落	自然堤防	绳文・弥生・奈良・平安	25 鹿出野田遺跡	集落	浜	弥生・古墳
9 中野遺跡	集落	自然堤防	中世	26 下麻田遺跡	集落	浜	奈良・平安・中世
10 白山鬼舟遺跡	鬼舟遺跡	沙傾地	奈良・平安	27 雨森遺跡	集落	自然堤防	物語・平安
11 中央鬼舟遺跡	鬼舟遺跡	冲積地	奈良・古墳	28 安久米遺跡	集落	自然堤防	物語・古墳
12 伊は邊跡	集落	冲積地	奈良・平安	29 中新田遺跡	集落	自然堤防	古墳・中世
13 高沢遺跡	鬼舟跡・水田跡	冲積地	奈良・平安	30 桐原遺跡	水田	自然堤防	奈良・平安
14 下内澤遺跡	集落	自然堤防	绳文・平安	31 中日郷中島遺跡	集落	自然堤防	古墳・奈良・平安
15 元賀遺跡	集落	自然堤防	奈良・平安	32 神明遺跡	包合	自然堤防	古墳・奈良・平安
16 大野田遺跡	集落	自然堤防	奈良・平安	33 ハナノ内遺跡	集落	自然堤防	古墳・奈良・平安
17 大野田遺跡	集落	自然堤防	绳文・中世	34 間和北遺跡	集落	自然堤防	古墳・奈良・平安

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

## II. 遺跡の概要

### 1. 位置と地形

昭和北遺跡はJR東北本線南仙台駅の東方3.7 km、名取川と広瀬川の合流点より下流2 kmの名取川南岸に所在する。遺跡範囲内の標高は5 m前後である。

付近の地形としては、奥羽山脈から派生した丘陵がやはり奥羽山脈の山形県境に源を発する名取川により開拓されながら仙台市街地西方まで迫っており、名取川は北側の青葉山・茂庭丘陵と南側の高館丘陵の間を東流している。名取川はこれら丘陵間や低地部への出口付近では幾つかの河岸段丘を形成し、安定した流路であるが、それより下流では川幅を増し、現在まで幾度となく氾濫を繰り返してきた。仙台平野の海岸部近くでは数列の浜堤が確認できるが、名取川流域では土砂の供給の多さに加えて、旧河道による浸食もあってか浜堤の形成は少ない。

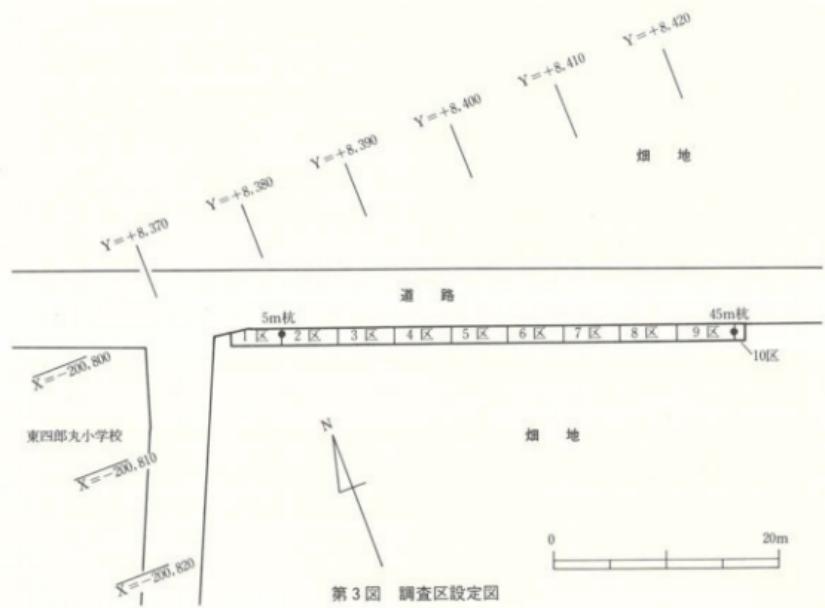
遺跡の立地する名取川南岸部においては、旧河道の状況が航空写真などから広範囲に数多く観察でき、加えてこれらに伴う自然堤防や後背湿地の存在が旧地形をより複雑なものとしている。遺跡はこの自然堤防の端に位置している。その南側は広大な水田地帯が広がる低地部となっており、周辺には幾つかの沼や微高地が点在し、尺丈島という地名も残っている。

### 2. 周辺の遺跡

昭和北遺跡の所在する四郎丸・袋原地区は西の中田地区に比べて確認遺跡数は少なく、調査件数も僅かなせいか、地域の歴史を知る上で資料に乏しいものと言える。この地区で調査された遺跡としては古墳時代前期の方形周溝墓と住居跡のほか、四郎丸館跡の堀が発見された戸ノ内遺跡、平安時代以前や中世の水田跡や溝跡が発見された後河原遺跡、古墳時代以降の居住域と生産域の関わりがわかった中田畠中遺跡がある。

名取川北岸地域は富沢遺跡を含む周辺遺跡から旧石器時代や縄文時代の遺構や遺物が多く発見されているのに対し、南岸地域は皆無に等しく、これは当時の地理的環境に起因するものと考えられる。この傾向は弥生時代でも変化は無いが、これが古墳時代になると様相は一変する。今回発見された住居跡の一部や戸ノ内遺跡同様、安久東遺跡の方形周溝墓と住居跡は古墳時代前期のものである。後期には近辺に城丸古墳、弁天園古墳、大塚山古墳や中田地区にもいくつかの小規模な古墳が造られる。この時代の集落跡には渠道跡や中田南遺跡などがある。奈良・平安時代にかけては各地で集落跡が営まれると同時に、この頃から水田耕作などの生産活動が活発化していったのもと考えられる。やがて中世になると四郎丸館跡、前田館跡、松木遺跡などをはじめとした館や屋敷が造られ、地域支配の拠点となっていたことが窺える。

南に接する名取市の遺跡についても以上のような傾向がみられ、特に古墳時代には巨大な古墳の造営や集落が営まれ、人間の諸活動の活発化した時代だったものと考えられる。



### III. 調査の概要

#### 1. 調査の方法

試掘調査の成果をもとにして、調査区は拡幅工事の西の起点である東四郎丸小学校の北東隅の道路交差地点より東へ約50m部分とした。既存の道路を通行可能な状況のままでの調査であったため、調査区幅は当初予定の2mより縮小せざるを得なく、また重機により現代の耕作土を除去する時点では、安全確保のため遺構確認面での実調査面積をかなり狭める結果となった。

調査はI・II層の耕作土を重機で西側から除去した後、遺物を含むとみられるIII～VI層の各上面を精査しながら、手掘りで掘下げていくことになった。しかし今回III～VI層上面で確認された遺構は無かった。

試掘時の遺構確認面であるVII層上面では西側から精査を行い、遺構を順次確認し、遺構番号を付けていった。調査区幅の狭さから、土層観察用のベルトは全ての遺構には設けず、遺構が調査区壁面と直交するものが多かったため、遺構の断面図は主として南北の調査区壁面で作成し、ベルトによる断面図でこれを補助した。掘上げ後の平面図は任意方向の座標軸を基準に作成した。これらの記録は断面図・平面図を1/20スケール、遺物の出土状況については1/10スケールで記録し、写真による記録は35mmカメラを使用した。

実測図を作成するための基準として、調査区内にこれと平行に任意の座標軸を設置した。座標は西端の調査区外に原点を置き、杭は東方向に5m間隔で設置している。計測の結果、調査区は東西約45mで幅1.4m～80cmとかなり狭い調査区となった。この5m杭と45m杭の2点の国上座標による座標数値を計測した結果は下記の通りで、調査区東西の座標軸より起きた南北方向軸は、真北より東へ20'55'偏していることがわかった。

[5m杭] X=-200,804.439 Y=+8,379.491

[45m杭] X=-200,818.718 Y=+8,416.856

またこの座標杭を用いてグリッドを設定した。これは原点0から5m杭までを1区とし、これより東に進むに従い数が増すようにし、計10区のグリッドを設定した。遺構外からの遺物の取上げはこのグリッド単位としている。

VII層上面で確認した遺構としては、住居跡6軒、上坑1基、溝跡3条、溝状遺構が2方向の計5条、ビット10個があったが、これにはVII層以外を掘込み面としているものも含まれている。

調査区東側にのみみられるVI'層については調査の制約上、北壁際に入れた側溝によりその堆積状況を把握し、VI'層の掘上げは原則として行わなかったが、側溝や確認遺構の壁面・底面を観察した限り、同地区VII層面での遺構の存在は認められなかった。またVII層を含む下層については調査の安全上、掘下げは行わなかった。

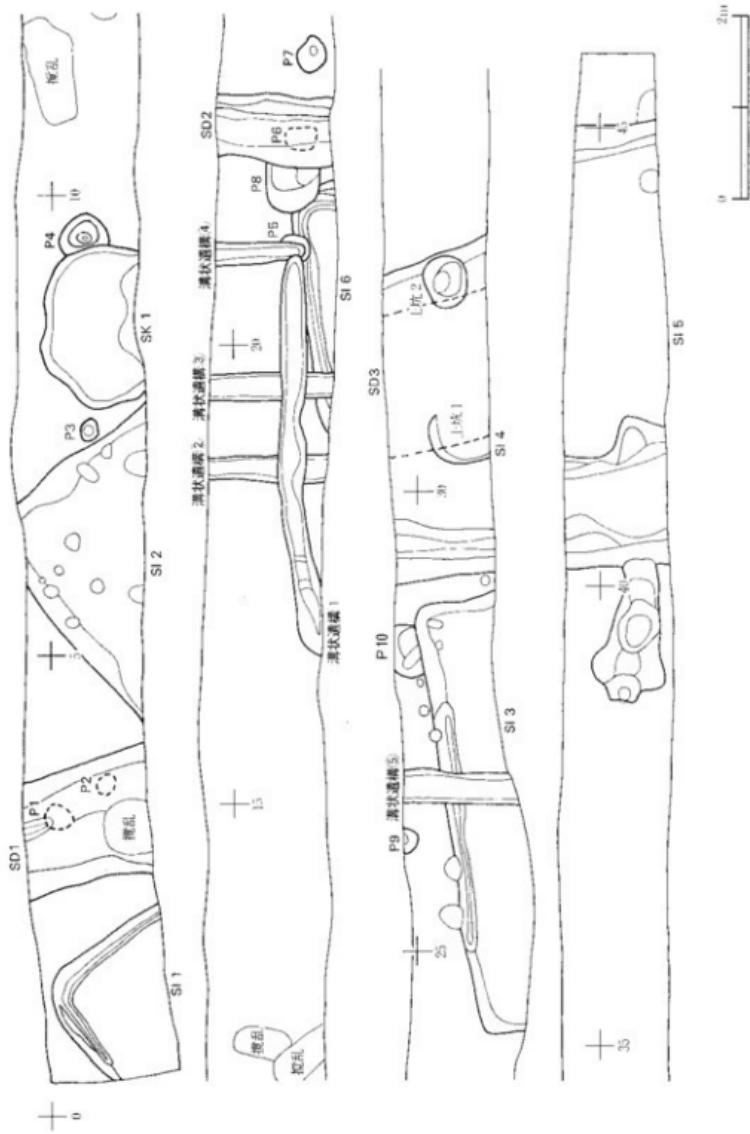
## 2. 基本層位

調査地は標高約5.2mで、ほぼ平坦地となっている。現況は畠地で、まず重機により掘込んだところ、耕作による天地返しがかなり深くにまで及んでいた。調査地が道路と畠との境界部分であったため、天地返しによる擾乱は調査区南側に限りみられ、III層以下の遺物を包含する層の残存はほぼ北側に限られる状況であった。従って調査区での北壁と南壁に見られる基本層の状況もかなり異なるものとなっている。

- |       |         |  |
|-------|---------|--|
| I a 層 | (盛土)    | 現耕作土上の一一部にみられる。  |
| I b 層 | (現耕作土)  | 調査区のほぼ全域にみられる。   |
| I c 層 | (天地返し層) | 深い箇所では90cmも下層を擾乱しており、下面は南北方向の溝状となる。  |
| II 層  | (耕作土)   | かつての畠の耕作土とみられる。層厚は10~25cmである。  |
| III 層 | 10YR4/3 | にぼい黄褐色シルト<br>層厚10~20cmで安定した層である。南側は天地返しにより全く残存しない。                                 |
| IV 層  | 10YR3/3 | 暗褐色シルト<br>層厚10~25cmで安定した層である。南側は天地返しによりごく一部に残存する。                                  |
| V 層   | 10YR4/4 | 褐色シルト<br>層厚5~20cmで安定した層である。南側は天地返しにより部分的に残存する。<br>灰白色火山灰を小ブロック状に部分的に含む。            |
| VI 層  | 10YR3/2 | 黒褐色シルト<br>層厚10~30cmではほぼ安定しているが、西側では層厚が薄くなっている。南側は天地返しにより一部上面が擾乱されている。1号溝跡の確認面である。  |
| VI' 層 | 10YR3/3 | 暗褐色粘性シルト・炭化物粒をまばらに含む。<br>層厚15~35cmと他層に比べて厚く、4号住居跡から東側にのみ見られる。4号・5号住居跡・3号溝跡の確認面である。 |
| VII 層 | 10YR6/3 | にぼい黄褐色シルト<br>層厚は不明で大部分の遺構の確認面である。  |

調査区の北約500mには名取川が東流し、周辺は旧河道や自然堤防が交錯し、かつては幾度となく多量の土砂が堆積したであろうことがうかがわれるが、層中に砂礫層などは全く認められない。ここでは主にシルト質土が堆積しており、各層とも層厚に多少の違いはみられるが、わりと安定した水平堆積状況をみせている。

遺物を出土した層はI・IV・V・VI層で、中でもVI層からの出土が量的に最も多く、これらは主にVII層面で確認された遺構に関係するものとみられる。



第4図 造構配図

## IV. 発見遺構と出土遺物

発見された遺構としては、VI層上面とVII層上面において、住居跡、土坑、溝跡、溝状遺構、ピットがある。調査区がトレント的なものとなつたため、住居跡などは全容がつかめなかつたが、遺構は調査区全体を通して偏ることなく発見され、このことから遺構の分布が広範囲にわたることが予想される。

出土遺物は2号住居跡においてまとまつた土器資料が出土した他は、全体的に量の多いものとは言い難い。土師器がほとんどで、中でも非ロクロの土師器が大部分を占めている。

### 1. 住居跡とその出土遺物

#### SI I 住居跡

[位置] 調査区の西端、1区に位置する。南北方向軸は真北に対して西に14°偏している。

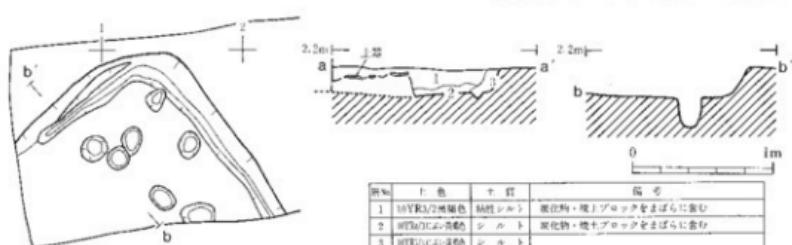
[確認状況] VII層上面で確認された。他の遺構との重複関係は無い。

[形態・規模] 北壁と東壁のみの確認で、コーナー部あまり角張らない方形を呈している。

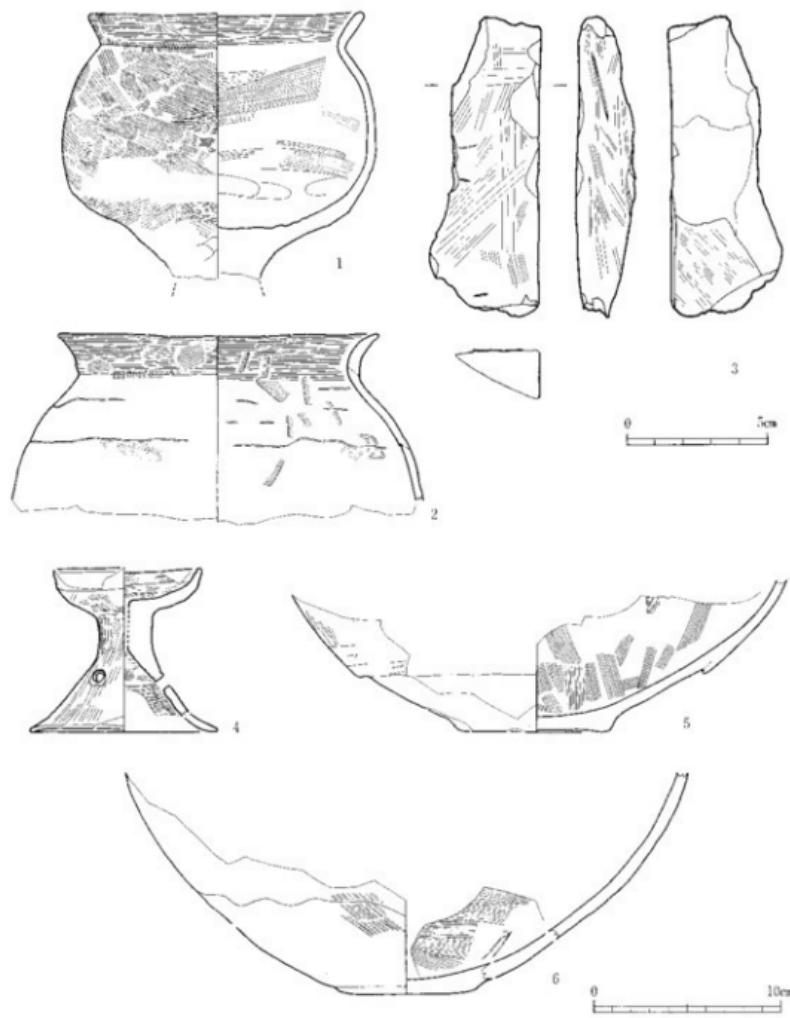
北壁1.2m、東壁1.4m

のみの住居北東部の確認のため全体規模は不明である。残存の深さは平均して約20cm程度である。

[堆積上] 3層に分層される。1層は黒褐色の粘性シルトで土器片が多く含まれている。2・3層はにぶい黄褐色のシルトで、3層は壁際のみの堆積である。全て自然堆積層とみられる。



第5図 SI I 住居跡



図版No.	登錄No.	種別	形状	造形・グリット	層位	外観概観	内部測量	口径	底径	高さ	備考	写真回数	分類
6-1	3	土師器	合付器	SI I	1	縦ハラナギ・横スジ等	横ハラナギ・横スジ等	147			38-1	複数	
6-2	6	土師器	腹?	SI I	1	横スジ等	横スジ等	170			38-2	複数	1a1
6-4	5	土師器	蓋?	SI I	1	横スジ等	横スジ等	88			38-3		
6-5	2	土師器	蓋?	SI I	1	横スジ等	横スジ等	62			38-5	複数	
6-6	1	土師器	蓋?	SI I	1	横スジ等	横スジ等	73			38-4	複数	
直径mm 登録No.													
6-3	4	器形	造形・グリット	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	GHT	使用例			参考	写真回数	分類
					横存(1.03×0.69×0.17)	87.5	此表記有り 表、裏、側面に使用例有り				43-3		

第6図 SI I 住居跡出土遺物

〔床面〕住居掘り方底面のVII層を床面としており、ほぼ平坦である。

〔周溝〕東壁全体と北壁の北東コーナーより1mのところまで壁面直下に確認された。断面形は偏平なU字形で、幅は広いところでも10cm、深さも4cm以内の浅いもので、堆積土は3層である。

〔柱穴・ピット〕床面上でピットを7個確認したが、いずれも径20cm以内、深さも20cm以内の小規模なもので、堆積土も单層のため、柱穴とするには至らなかった。

〔カマド・堀〕確認されなかった。

〔出土遺物〕全てが1層からの出土で、わりとまとまって出土したが、部分的調査のため、復元されたものは少なかった。出土したものは非ロクロの上師器壺（第6図2）・古付壺（第6図1）・器台（第6図4）・壺とみられるもの（第6図5・6）の他、砥石（第6図3）が出土した。この他にも非ロクロ土師器の破片が数点出土した。

## SI2 住居跡

〔位置〕1・2区に位置する。南北方向軸は真北に対して西に19°偏している。

〔確認状況〕VII層上面で確認された。他の遺構との重複関係は無い。

〔形態・規模〕1号住居跡同様、北壁と東壁のみの確認で、北東コーナー部もまた未確認であるため、形状は不明であるが、方形の住居とみられる。全体規模は不明である。確認された北壁は2m、東壁は1.8mで、残存の深さは8~12cm程度である。

〔堆積土〕2層に分層される。いずれも暗褐色・黒褐色の粘性シルトで自然堆積層とみられる。

〔床面〕住居中央部はVII層が床面となっているが、その周囲で壁面より約40~50cm幅の周溝状の部分は黒褐色粘性シルトの掘り方埋土が床面となっている。掘り方は中央部のVII層面より深い部分で約10cm程の深さで、底面は凹凸が目立ち、中央・壁面方向に緩急様々に立ち上がっていく。

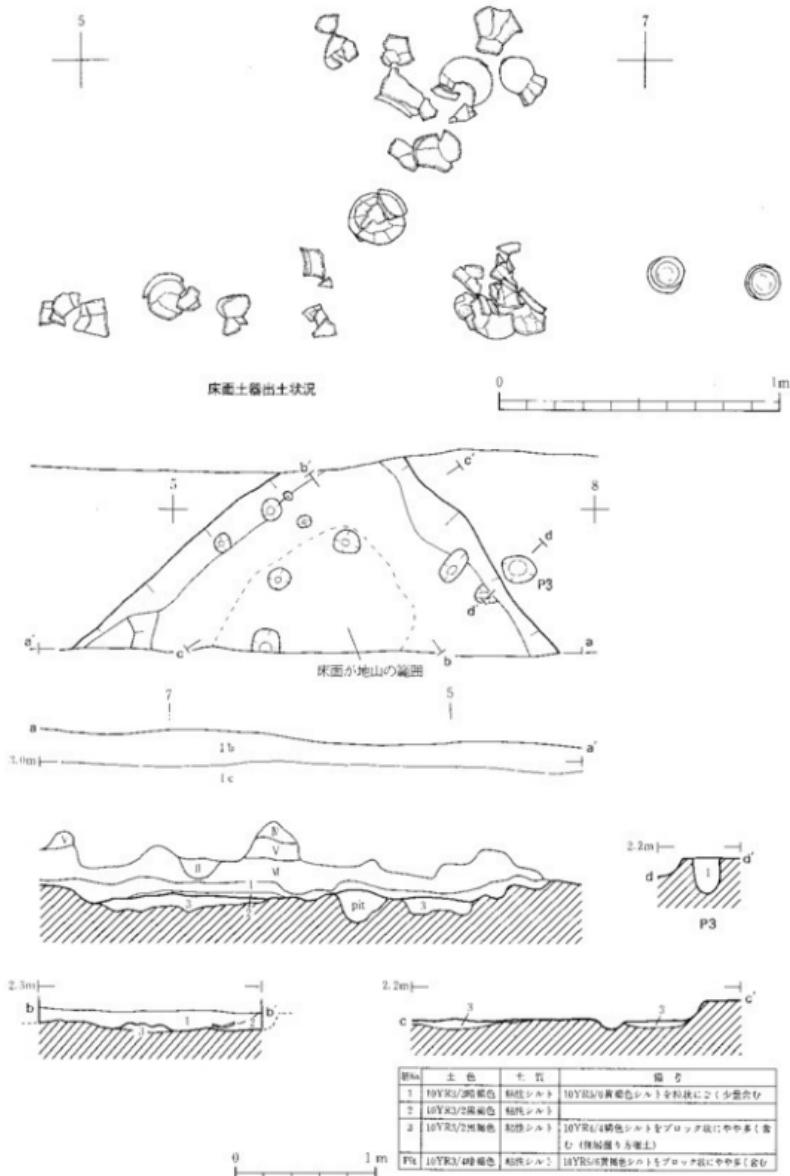
〔周溝〕平面的には確認できなかったが、調査区南壁での断面観察では住居東壁直下に若干の落込みがみられることから、周溝を伴うものであった可能性がある。周溝埋土は1層である。

〔柱穴・ピット〕床面精査の際に中央部のVII層面にいくつかのピットを確認した後、掘り方埋土を掘上げた状況で周溝状にまわる掘り方の底面の壁際でいくつかのピットを確認している。

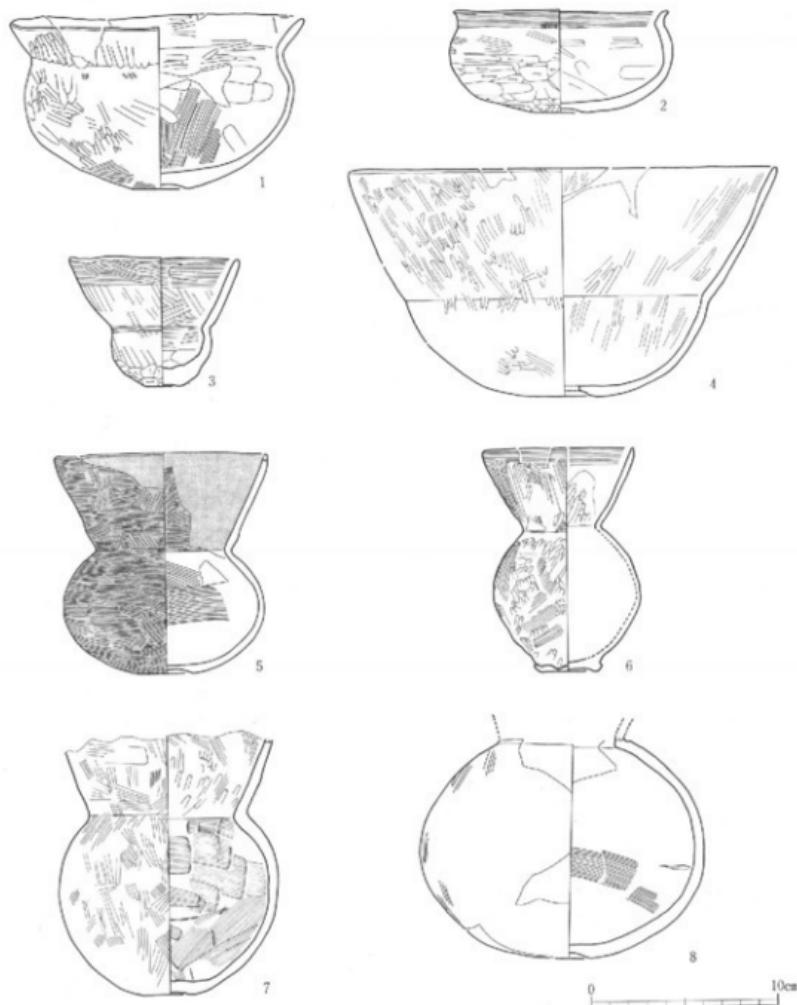
しかしこれらはいづれも小規模で位置的な面からも積極的に柱穴とするには至らなかった。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔出土遺物〕非ロクロ上師器が床面上よりほぼ復元できる状態で数個体出土した。壺（第8図1・2・3・4）・壺（第8図5・7・8）・小型壺（第8図6）・甕（第9図1・2・3・4・5）・古付壺（第9図6）が出土した。

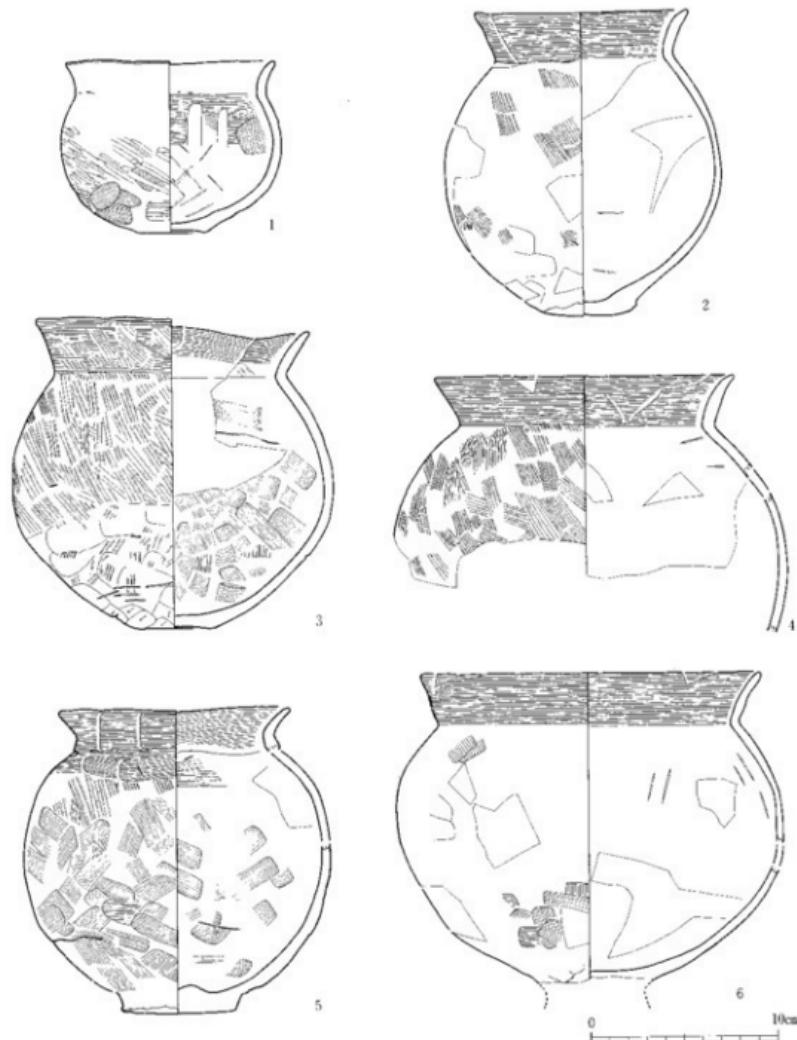


第7図 Si 2 住居跡、P3



図示名	形跡%	種別	形状	遺構・グラット	層位	外周輪郭	内部構造	U寸	軸径	基面	底	厚さ	写真回数	分類
8-1	8	土師器	杯	SI2	底面	縦長楕円形、内側に凹部、外側に凸部	内側に骨格、外側に木炭	159	30	95			39-1	環1a
8-2	15	土師器	杯	SI2	底面	縦長楕円形、内側に凹部、外側に凸部	内側に骨格、外側に木炭	113	33	58			39-2	環1b
8-3	13	土師器	杯	SI2	底面	縦長楕円形、内側に凹部、外側に凸部	内側に骨格、外側に木炭	91	20	70	90-25.7		39-3	環1b
8-4	7	土師器	杯	SI2	底面	縦長楕円形、内側に凹部、外側に凸部	内側に骨格、外側に木炭	(320)	95.6	122			39-4	環1a
8-5	9	土師器	水	SI2	底面	縦長楕円形、内側に凹部、外側に凸部	内側に骨格、外側に木炭	115	31	128	115		39-5	環1a
8-6	11	土師器	小壺	SI2	底面	縦長楕円形、内側に凹部、外側に凸部	内側に骨格、外側に木炭	69	31	128			39-6	環1b
8-7	16	土師器	壺	SI2	底面	縦長楕円形、内側に凹部、外側に凸部	内側に骨格、外側に木炭	(115)	27	145			39-7	環1b
8-8	19	土師器	壺	SI2	底面	縦長楕円形、内側に凹部、外側に凸部	内側に骨格、外側に木炭	(25)					39-8	環1a

第8図 SI 2 住居跡出土遺物 (1)



図版No.	壁面No.	種別	形態	施機・グリット	層位	外観調査	内面調査	H径	底径	高さ	備考	写真撮影
9-1	14	土師器	罐	SI2	床面	内面:ヘラジダ、粗面	111	36	33		40-1	壁1c
9-2	17	土師器	壺	SI2	床面	内面:ヘラジダ、粗面	115b	52	163		40-2	壁1b
9-3	18	土師器	壺	SI2	床面	内面:ヘラジダ、粗面	146	43	168		40-3	壁1a1
9-4	20	土師器	壺	SI2	床面	内面:ヘラジダ、粗面	160	43	168		40-4	壁1a1
9-5	15	土師器	壺	SI2	床面	内面:ヘラジダ、粗面	123	41	165	鉢底丸く削り落とす	40-5	壁1a1
9-6	12	土師器	古付壺	SI2	床面	内面:ヘラジダ、粗面	183	43	168		40-6	壁1b

第9図 SI 2 住居跡出土遺物（2）

### SI 3 住居跡

3号住居跡は床面においてもう1つの住居プランがみられたことより、調査区内で確認した限り、後に東・西・北方向に拡張される改築を作った住居跡であることがわかった。ここでは最初に確認された改築後の住居跡をa住居、その床面で確認した改築前の住居跡をb住居として記することにする。

【位置】 6区を中心に位置する。a・b住居とも南北方向軸は真北に対して東に12°偏している。

【確認状況】 a住居はVII層上面で確認され、a住居の床面精査の際に床面内に収まる形でb住居が確認された。a住居は溝状造構⑤に切られており、P10を切っている。但し b住居とP10との新旧関係は不明である。

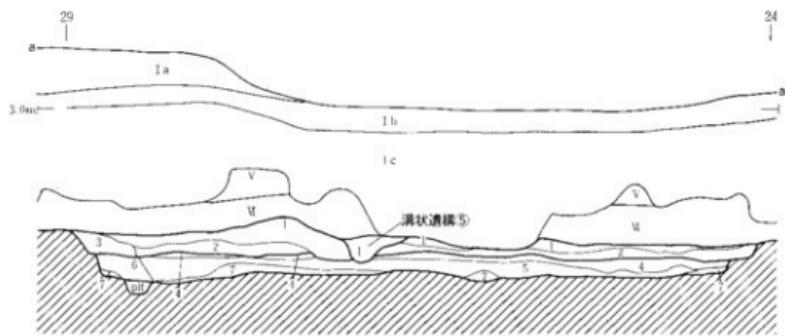
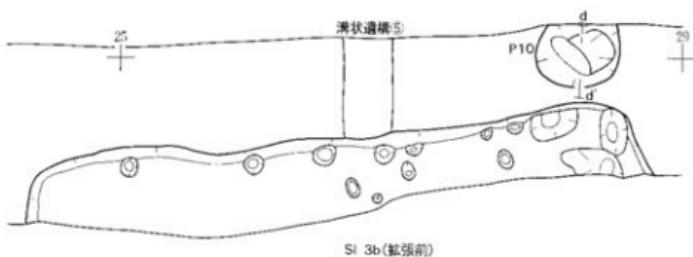
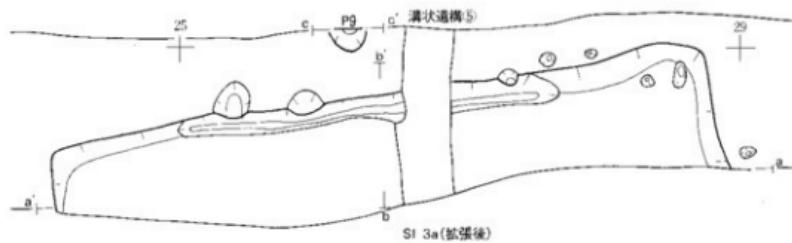
【形態・規模】 a住居は東・西・北壁が確認された。中でも北壁は一辺の長さがわかり、上端で4.7m、床面で4.5mを測り、コーナー部がわりと角張った方形を呈するものとみられる。b住居はやはり三つの壁が確認され、北壁の上端で4.2m、床面で4mを測るが、コーナー部はa住居に比べてやや丸みを帯び、これは本来、壁の中位での確認であることから起因するものかもしれない。拡張規模としては西壁の下端で20cm、北壁で平均して15cm、北東コーナー部では30cmとばらつきがみられる一方、下端位置に全く変化の無い箇所もみられる。a・b住居とも壁面の残存は少なく、床面までの深さはa住居で10~15cm、b住居は10~20cmを測る程度である。壁面立上がりは概してa住居の方が緩やかなものとなっている。

【堆積土】 a住居は1~3層の3層、b住居は4~7層の4層に分層される。1・2層はa住居全体にみられる褐色系の粘性シルトで、3層は主として東壁付近にみられる暗褐色のシルトである。4層は褐色の粘性シルト、5層は黒褐色の粘性シルトで、b住居堆積土の大部分を占める層である。6層は3層同様b住居の東壁付近にみられる層で、最下層の7層は褐色の粘性シルトで層厚は5cm以内で床面のはぼ全体を覆っている。4・5層には地山層であるVII層が小ブロックとして多量混入しており、その状況からa住居を造る際にb住居内に入為的に埋戻した層とみられる。

【床面】 a住居はb住居の入為堆積層とみられる4層面を床面としており、ほぼ平坦面を形成している。b住居は振り方底面のVII層を床面としており、やはりほぼ平坦面をみせる。またa住居を造る際には平面規模のみの拡大のみならず、床面レベルも全体的に10~20cm程度かさ上げしている。

【周溝】 a住居は北壁の中央に約2.7m、幅15cm、深さ5cm以内の周溝が確認されたが、北壁で途切れ、東西壁に延びるものではない。b住居に周溝は確認されなかった。

【柱穴・ピット】 a・b住居の内外に数個のピットが確認された。但し住居外のピットについては住居に伴うものとは言い難い。またa住居の床面精査時には下部のb住居の堆積土のため、正



第10図 SI 3 住居跡、P 9 + 10



図版No.	登錄No.	種別	器形	地紋・アラベスク	施色	外表面物	内面同様	口径	直径	最高	参考	年齢層	分類
11-1	21	土器部	壺	SI 3a	無施土	口縁部：朱彩テクスチャ 全体：ロクロナゲ	口縁部：ロクロナゲ 全体：ロクロナゲ	13.2	13.2	41	1	後	後
11-2	22	堆積土	(不明)	SI 3a	無施土	全体：半：ロクロナゲ+ナガ	全体：ロクロナゲ			43	2	後	後

第11図 SI 3 住居跡出土遺物

確なピットの確認ができず、壁際以外のピットについては全てb住居床面精査時の確認となり、a・b住居いずれに伴うものかは不明である。確認されたピットはみな小規模で、深いものでも10cmを測るに過ぎない。堆積土も単層で、位置的な面からも積極的に柱穴とするには至らなかった。

[カマド・炉] a・b住居とも確認されなかった。

[出土遺物] a住居の堆積土から非ロクロ土師器甕（第11図1）、口縁部がかなり内済する須恵器の碗状のもの（第11図2）が出土した。この他に外面朱彩の土師器がみられる。またb住居の堆積土から繩文土器とみられる小破片が1点のみ出土したが、詳細は不明である。

#### SI 4 住居跡

[位置] 6・7区に位置する。南北方向軸は真北に対して東に1~14°偏している。

[確認状況] VI'層上面で確認された。4号住居跡は3号溝跡を切っている。

[形態・規模] 西壁と東壁のみの確認であるが、そのラインが直線的なことから方形の住居跡とみられる。但し西壁と東壁の方向が平行ではなく、若干異なっている。確認された西壁の長さは1.1m、東壁は1.2mで、東西軸長は3.4~3.6mを測り、ほぼ一辺の長さは把握できるが、全体規模は明らかでない。残存状況は狭い範囲ながら調査区北壁際で良好で、南壁際の深さが4~10cmで壁面の立上がりも不明瞭なのに対し、北壁際では10~15cmほどで壁面は45°の傾きをみせる。

[堆積土] 黒褐色の粘性シルトの1層のみで、自然堆積層とみられる。

[床面] 西半はVII層を床面としており、東半はその下部に3号溝跡があるため、溝内堆積土を床面としている。また床面はほぼ平坦であるが、小さな起伏が多くみられる。

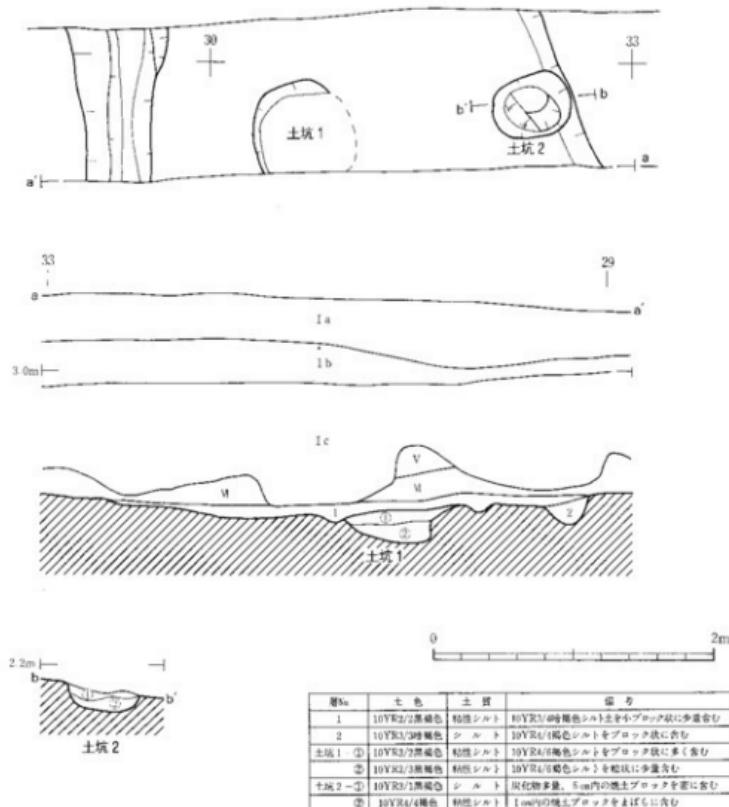
[周溝] 西壁にのみその直下に確認された。断面形はU字形で、幅40~60cm、深さ10~15cmを測る北側では幅広の溝である。堆積土は暗褐色シルトで、周溝内ののみの堆積土である。

[カマド・炉] 確認されなかった。

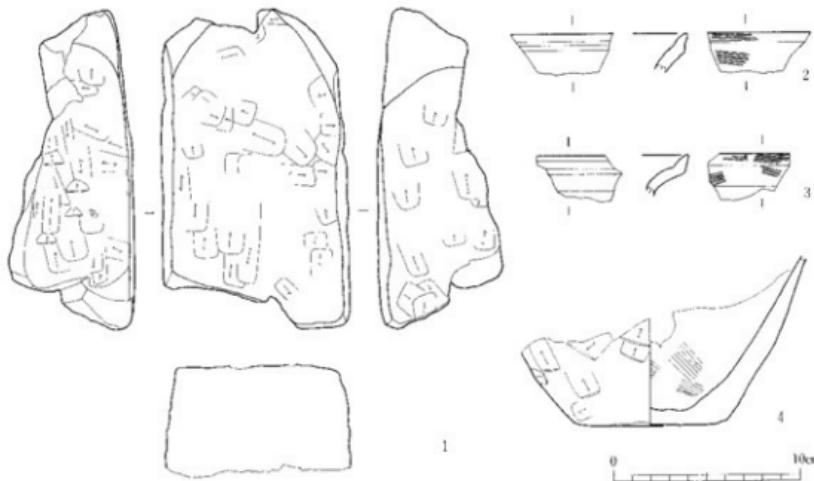
[その他の施設] 床面において土坑を2基確認した。土坑1は住居のほぼ中央に位置し、東壁が不明瞭であるが、径約80cmの円形とみられ、深さは25cmを測る。堆積土は黒褐色粘性シルト

の2層で、これらは住居堆積土に類似する。土坑2は東壁にかかる形で確認され、径55×45cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。堆積土は黒褐色シルトと褐色粘性シルトの2層で、特に1層は炭化物粒や径5cm内の焼土ブロックを多く含む層である。しかしながら層上面や土坑底面に焼面などは確認されなかった。また土坑2の両側や煙道にあたる位置に何の痕跡もみられないことから、カマドとは一応区別している。

[出土遺物] 1層からロクロ土師器甕(第13図3)、おそらくはカマド内の支脚とみられる四角錐状の土製品(第13図1)、土坑2堆積土からロクロ土師器甕(第13図2・4)が出土した。他にも同様の破片数点が出土した。



第12図 SI 4 住居跡



試験No	実跡No	検出	基附	追跡・グリット	施設	外周調査	内周調査	日付	鉄錠	器高	備考	参考図版	分類
13-1	23	木製品	(平頭)	S14	1	表・裏・側面→ハラケアリ		現存部厚	厚さ	11.00	二次的な焼け跡あり	42-2	
13-2	26	土師器	裏	S14 土斑2	七頭輪	口縁部:ロクロナギ	口縁部:ロクロナギ→ハケメ	11.42	(10.00)	(0.60)		42-1	
13-3	24	土師器	裏	S14	1	口縁部:ロクロナギ	口縁部:ロクロナギ→ハケメ					42-2	
13-4	25	土師器	裏	S14 土斑2	七頭輪	全体下半:ハラケアリ	全体:ハケメ			8.0		42-3	

第13図 SI 4 住居跡出土遺物

### SI 5 住居跡

【位置】 調査区の東端、8・9区に位置する。南北方向軸は真北に対して東に14°偏している。

【確認状況】 VI'層上面で確認された。他の遺構との重複関係は無い。

【形態・規模】 4号住居跡同様、西壁と東壁のみの確認で、そのラインが直線的なことから方形の住居跡とみられる。確認された西壁の長さは1.1m、東壁は85cmで、東西軸長は4.8mを測るが、全体規模は明らかでない。残存状況は東壁で約20cmで、床面から緩やかに立上がりるので対して西壁は幅広の溝がみられるため、溝底面からの立上がりは40cmを測る。

【堆積土】 3層に分層される。1・2層は暗褐色の粘性シルトで、1層が西壁際の溝上ののみレンズ状堆積しているのに対して、2層は溝から住居全体にみられる層厚のあるものである。また2層下面には炭化物粒を多量含んでいる。3層は灰黄褐色シルトで炭化物を僅かに含んでいる。1・2層は自然堆積層とみられる。

【床面】 VII層での床面は中央部でやや高まり、東西壁に向かってやや落込んでおり、平坦面は形成されていない。床面確認時には2・3層間に堆積状況を区別することはできず、3層が西壁部で溝内堆積をみせ、東壁で壁上部まで堆積している自然堆積的な状況がみられるが、床面

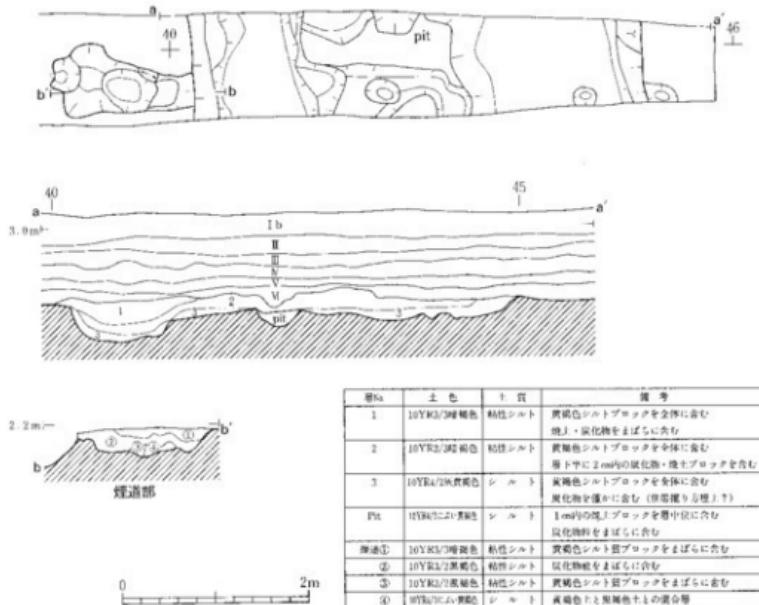
の様子や断面観察などから、3層は掘り方埋土の可能性が考えられ、その上面が床面を形成していた可能性も考えられるが判然としない。

【周溝】 西壁にのみその直下に確認された。幅1.1mと幅広で、深さ約20~35cmを測り、底面はわりと平坦である。堆積土は1~3層がそのまま流入している。

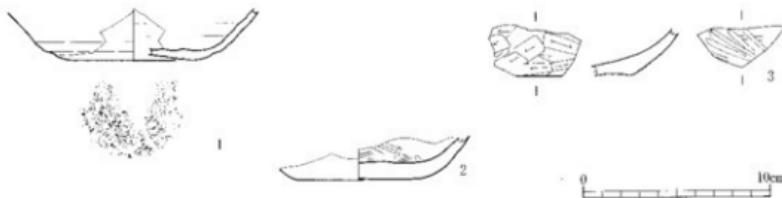
【柱穴・ピット】 床面或いは掘り方底面上でいくつかのピットを確認した。調査区北壁際のものは径50cm、深さ15cmで、堆積土中に焼土ブロックを含むものである。しかしながら柱穴とするには至らなかった。

【カマド・炉】 西壁外部にカマドの煙道のみが確認された。天井部は失われているが長さ1.5m、基部での幅は35cm、端部では75cmで、端部で若干広がりやくぼむピット状を呈する。壁面が一部オーバーハングしているが、これは壁面の崩落とみられる。堆積土中には炭化物粒が僅かにみられたが、焼土などは確認されなかった。また煙道部の住居内側にカマド本体は確認されなかつたが、これは後に溝を掘る際に壊されたものと考えられる。

【出土遺物】 煙道堆積土から非ロクロの土師器坏（第15図3）、ロクロ土師器坏（第15図2）、ピット堆積土から須恵器坏（第15図1）が出土した。他には住居堆積土からロクロ土師器表、須恵器表、鐵塊が出土した。



第14図 SI 5 住居跡



第15図 SI 5 住居跡出土遺物

### SI 6 住居跡

【位置】 4・5区に位置する。南北軸方向は真北に対して東に12°偏している。

【確認状況】 VII層上面で確認された。6号住居跡は溝状構造やP5・8に切られている。

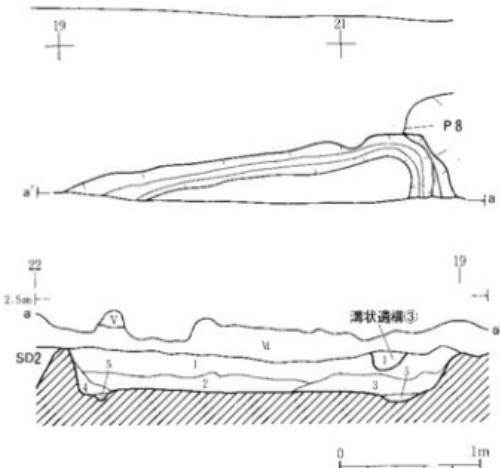
【形態・規模】 北壁と東壁のごく一部の確認で、北壁はほぼ直線的で、コーナーをもって東壁へとつづくことから方形の住居跡とみられる。確認された北壁の長さは2.6m、東壁は僅か40cmを測るのみで、全体規模は明らかでない。残存状況は深さ20~35cmで、両壁ともわりと急な立上がりをみせる。

【堆積土】 5層に分層される。全層とも褐色系のシルトや粘性シルトで、1~4層は床面上堆積上、5層は周溝内堆積土で全て自然堆積層とみられる。

【床面】 調査部分に限ってみると、住居跡掘り方底面のVII層を床面としており、平坦である。

【周溝】 北壁・東壁ともその直下に確認された。幅は10~15cmと狭く、深さも5cm以内の小規模なもので、断面形はU字形を呈する。

【柱穴・ビット】 確認されな



層	上色	土質	備考
1	10YR4/4褐色	シルト	10YR4/2c(灰褐色シルト)を軟弱に含む
2	10YR4/4褐色	粘性シルト	10YR5/4c(灰褐色シルト)を軟弱に含む
3	10YR3/4褐色	粘性シルト	10YR4/4褐色シルトを軟弱に含む
4	10YR3/4褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトを軟弱に少量含む
5	10YR4/4褐色	粘性シルト	10YR4/4褐色シルトを軟弱に少量含む

第16図 SI 6 住居跡

かった。

【カマド】確認されなかった。

【出土遺物】住居堆積土から土師器が1点出土したのみである。

## 2. 土坑とその出土遺物

### SK I 土坑

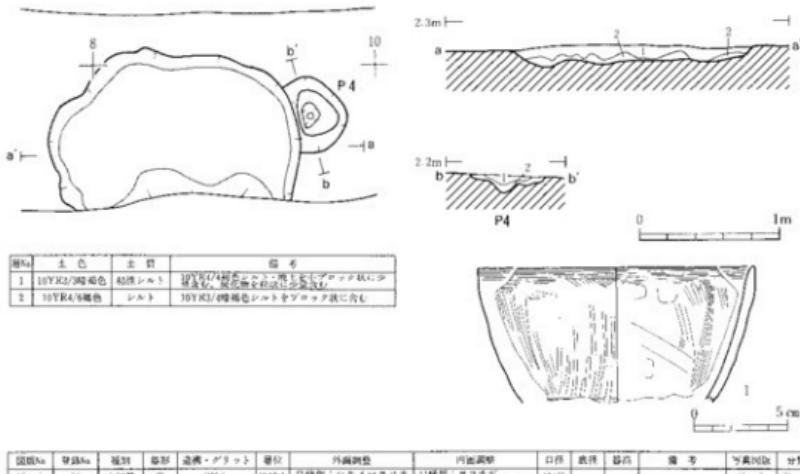
【位置】2区で2号住居の東に位置する。短軸方向は真北に対して東に19°偏している。

【確認状況】VII層上面で確認された。1号土坑はP4を切っている。

【形態・規模】東西方向に長軸をもつ椭円形を呈するものとみられる。南側の一部が調査区外となっている。長軸1.8m、短軸1.1m以上とみられ、深さ20~25cmで近接する1・2号住居跡同様に残存状況は悪く、このため壁面の立上がりは不明である。

【堆積土】2層に分層される。1層は焼土ブロックを少量含むが、自然堆積層とみられる。

【出土遺物】堆積土から非ロクロの土師器壺（第17図1）・壺・甕の他、用途不明の土製品が出土した。



第17図 SK I 土坑、P4

## 3. 溝跡・溝状遺構

### SD I 溝 跡

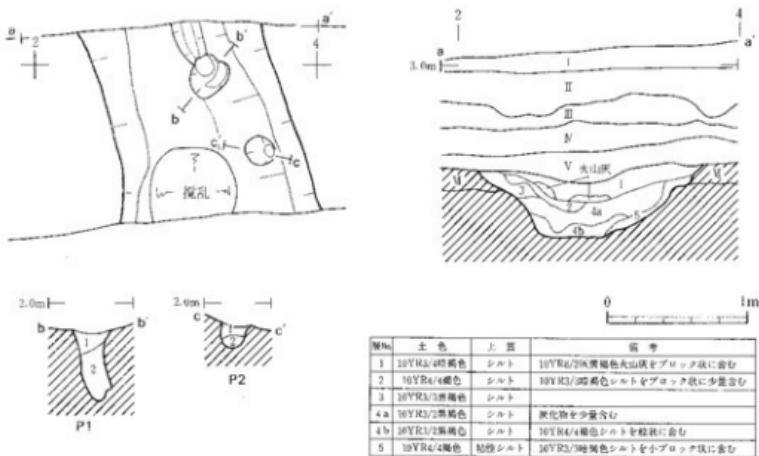
【位置】1区で1号住居跡と2号住居跡の間に位置する。溝方向は真北に対して東に3°偏している。

〔確認状況〕 VII層上面で確認されたが、断面観察の結果、掘込みはVI層上からである。1号溝跡はP1・2を切っている。

〔形態・規模〕 調査区を南北に横断する溝跡で、断面形からみると上端幅1.5m、下端幅40cmを測る。底面は平坦で、両壁とも30°～45°と緩やかに立上がりしていく。調査部分が狭く、溝傾斜方向は不明である。

〔堆積土〕 5層に分層される。全層とも褐色系シルトの自然堆積層とみられ、2層上面に灰白色火山灰を部分的にブロック状に挟んでいる。

〔出土遺物〕 堆積土から非ロクロ土師器や須恵器が出土した。



第18図 SD I 溝跡、P1・2

## SD 2 溝跡

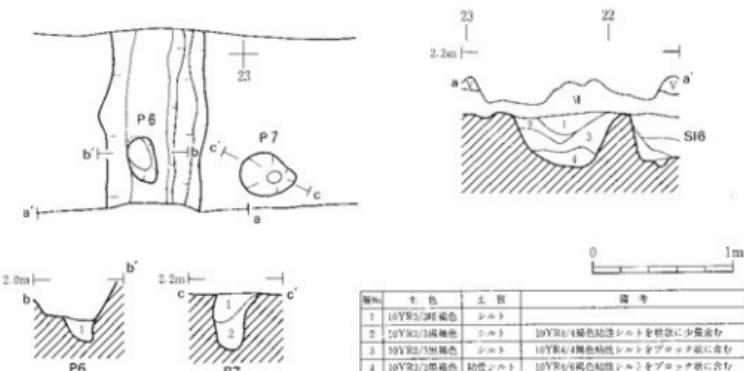
〔位置〕 5区で3号住居跡と6号住居跡の間に位置する。溝方向は真北に対して東に24°偏している。

〔確認状況〕 VII層上面で確認された。2号溝跡はP6・8を切っている。

〔形態・規模〕 調査区を南北に直交して横断する溝跡で、上端幅65～75cm、下端幅25cmを測る。底面はやや丸みをもち、壁面は約45°の傾きで立上がりていく。調査部分が狭く、溝傾斜方向は不明である。

〔堆積土〕 4層に分層される。1層が暗褐色土、2～4層が黒褐色のいづれもシルト・粘性シルトで、全層とも自然堆積層とみられる。

〔出土遺物〕 堆積土からロクロ土師器とみられる1点が出土したのみである。

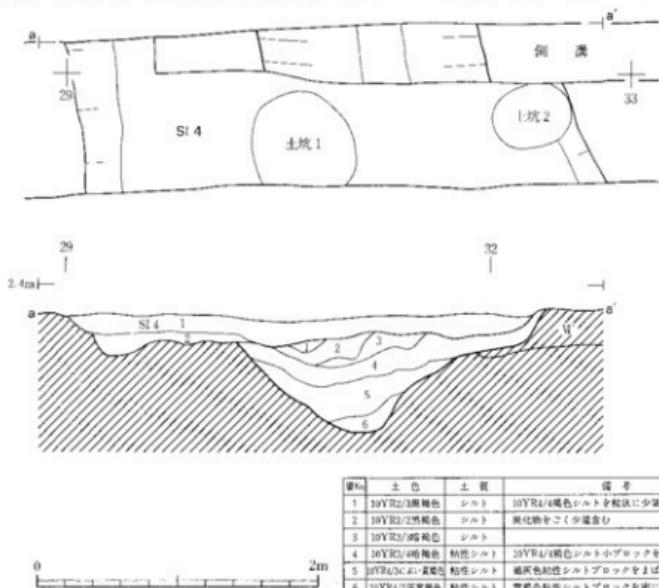


第19図 SD 2溝跡、P6・7

### SD 3 溝跡

[位置] 7区で4号住居跡下に位置する。溝方向は真北に対して東に9°偏している。

[確認状況] 4号住居跡床面で確認されたが、断面観察の結果、掘込みは4号住居跡と同じくVI'層上からである。3号溝跡は4号住居跡に切られている。溝跡の調査は調査区北壁から幅約



第20図 SD 3溝跡

30~40cmをトレンチ状に掘下げるに止めた。

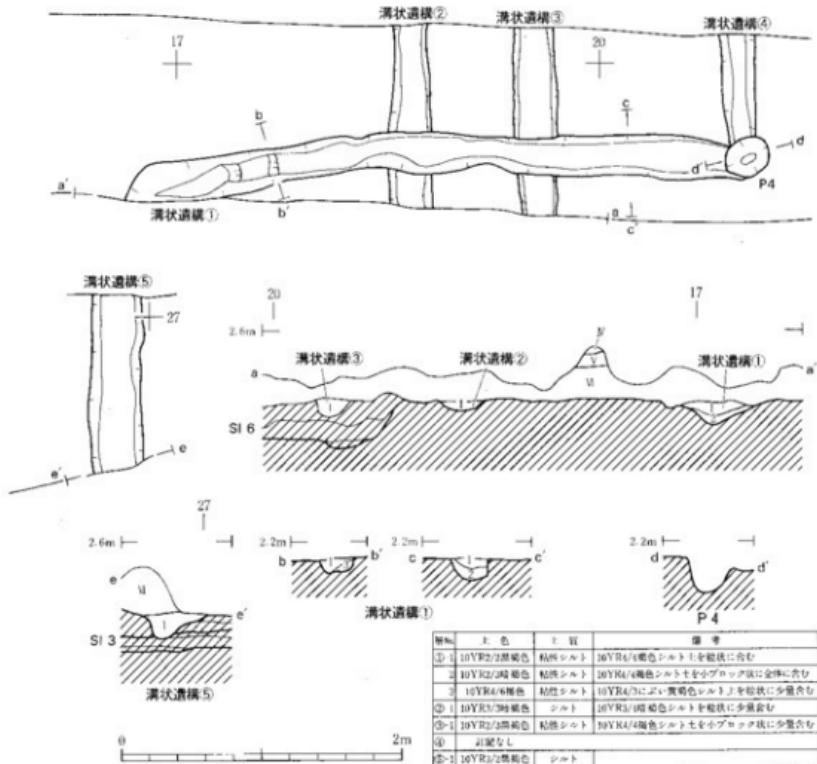
【形態・規模】確認状況とトレンチ調査からみる限り、調査区を南北に横断する溝で、殆どが4号住跡床面での確認であった。ここでの幅は1.6m程度でしかないが、一部断面でみられるVI層までの立上がり幅からみると、約2.3m程あった溝であることがわかった。底面は狭く、丸みをもち、壁面は約45°の傾きで立上がっていいく。調査部分が狭く、溝傾斜方向は不明である。

【堆積土】6層に分層される。層上半の1~4層は黒褐・暗褐色のシルトで、下半の5・6層は黄褐色系の粘性シルトがみられ、全層とも自然堆積層とみられる。

【出土遺物】出土遺物は無かった。

#### 溝状遺構(①~⑤)

【位置】4~6区に位置する。②~⑤の溝方向は真北に対して東に19°偏しており、①はそれらに直交している。



第21図 溝状遺構、P 5

〔確認状況〕 VII層上面で確認された。溝跡は東西方向の①と、これと直交する南北方向の②～⑤の計5条から構成される。⑤は他のものより東に離れて位置する。溝間の切り合いは①が②～④を切っており、他との関係では③が6号住居跡を、④がP5を、⑤が3号住居跡を切って確認された。

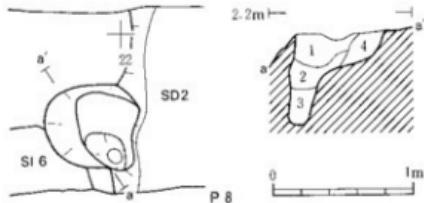
〔形態・規模〕 ①～⑤は幅20～30cmではほぼ同様のものだが、深さはやや深い①で15cm、浅いものでは5cmと異なりをみせるが、いずれもそう深いものではない。底面は平坦なものあれば丸みをもつものもみられる。剖面状況からみると、溝跡は本来より深さをもつものだったとみられる。同方向の溝跡の間隔は②と③が90cm、③と④が1.5m、④と⑤が5.8mとばらつきがある。溝跡は全て調査区外に延びるため全体は明らかでないが、①は西端部で若干南へ曲り、東端では④との交点で④同様に途切れ、それ以上は延びない。

〔堆積土〕 ①は3層に分層され、褐色系の粘性シルトが入る他、②・③・⑤もほぼ同様の土色・土質であるが、①が他に比べてやや黒色を呈している。

〔出土遺物〕 ⑤の堆積土から土師器が出土した。

#### 4. ピット

これまで記してきた遺構以外にいくつかのピットを確認した。これらは一応、木根など自然のものや人為的擾乱とは区別し、他の遺構には伴わず、独自に存在したとおもわれるものを記録している。しかしこれらは数が少なく、調査区の制約などから、柱穴などとして遺構を形成するようなものとは認められなかった。またピット内からの遺物の出土も無かった。



No.	種類	範囲 (cm) 北緯×東経×深さ	層	土 色	上 質	備考	持入団
P1	SD1 表面	30×25×20	1	10YR4/3に5い青褐色	粘性シルト		SD1 1回
				10YR5/4に5い黄褐色	粘性シルト		
P2	SD1 底面	20×15	1	10YR4/3に5い青褐色	粘性シルト		SD1 1回
				10YR5/4に5い黄褐色	粘性シルト		
P3	VII層	25×20×25	1	10YR4/3暗褐色	粘性シルト		SD2 1回
P4	VII層	54×12	1	10YR5/3暗褐色	粘性シルト	黄褐色少ブロックを全体に含む	SK1 1回
				10YR4/4褐色	粘性シルト		
P5	VII層	32×25×20				計2箇所なし	連続遺構層
P6	SD2 表面	35×15×15	1	10YR4/3暗褐色	粘性シルト	10YR4/4褐色シルトを斜状に含む	連続遺構層
P7	VII層	40×31×39	1	10YR2/3暗褐色	粘性シルト	黒化物を地状に少量含む	連続遺構層
				10YR3/3暗褐色	粘性シルト	10YR4/4褐色シルトを斜状に含む	
P8	VII層	72×46×65	1	10YR3/3暗褐色	シルト	10YR5/4暗褐色シルトを斜状に含む	P 8 1回
				10YR4/4褐色	シルト	10YR5/4暗褐色シルトを斜状に含む	
				10YR2/3暗褐色	粘性シルト	10YR5/4暗褐色シルトを斜状に含む	
				10YR4/4褐色	粘性シルト	10YR5/4暗褐色シルトを斜状に含む	
P9	VII層	26×37	1	10YR3/3暗褐色	粘性シルト		SD1 1回
			2	10YR4/4褐色	粘性シルト		
P10	VII層	60×25	1	10YR3/4暗褐色	粘性シルト		SK1 1回
				10YR4/4褐色	粘性シルト		
				10YR5/4暗褐色	粘性シルト		
				10YR4/4褐色	粘性シルト		

第22図 ピット

## 5. 遺構外からの出土遺物

遺構以外からの遺物としては、I・IV・V・VI・VII層からの出土がある。また調査区外ではあるが、道路を挟んで北側畠地からの表採資料がある。

I層から出土し、図示したものは、非クロロ土師器甕（第23図5）・壺（第24図1）・小型土器（第23図2）、ロクロ土師器壺（第24図5・6）、赤焼土器（第24図4）、須恵器壺（第24図12）・甕（第25図2・4）、瓦（第25図6）がある。

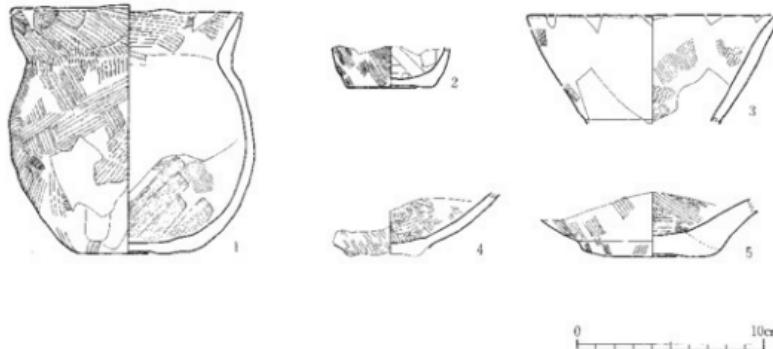
IV層から出土し、図示したものは、須恵器甕（第25図1）がある。

V層から出土し、図示したものは、ロクロ土師器壺（第24図8）がある。この他にも非クロロ土師器、須恵器壺などがある。

VI層から出土し、図示したものは、非クロロ土師器甕（第23図1）・壺（第23図3）（第24図3）、ロクロ土師器壺（第24図7）、須恵器甕（第25図3）、砥石（第25図7）がある。この他にも非クロロ土師器壺、ロクロ土師器甕・高台付壺、須恵器壺などがある。

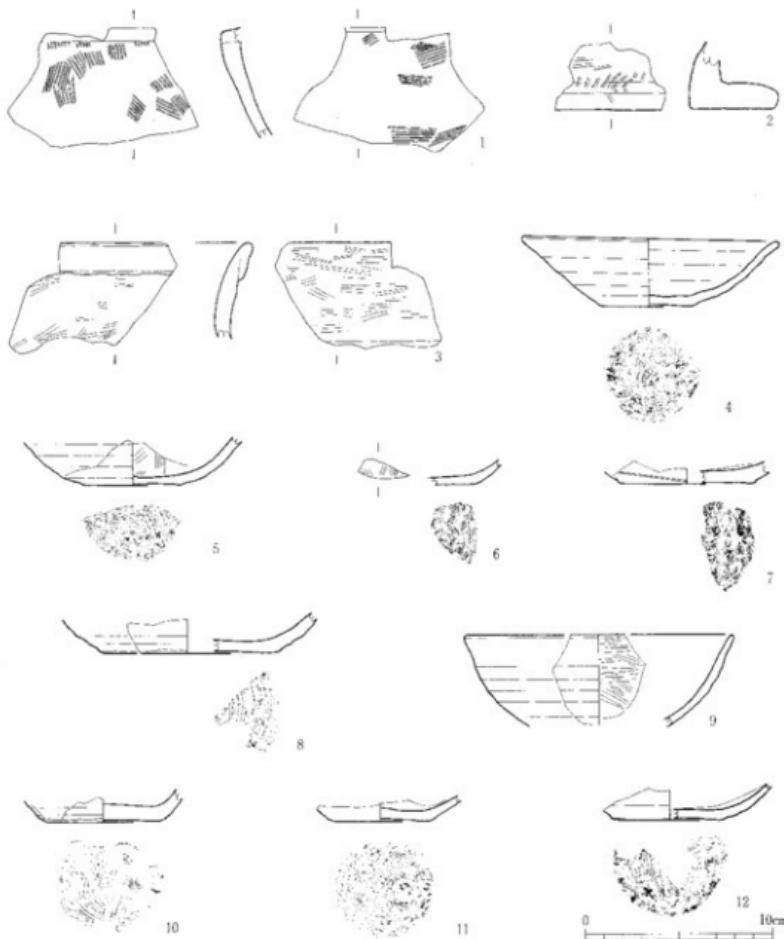
VII層からの出土遺物は非クロロ土師器が僅かにみられるのみで、図示したものは無い。

以上みたもの以外に北側畠地での表採遺物が数点あった。図示したものは、非クロロ土師器高壺（第23図4）、器種不明品（第24図2）、ロクロ土師器壺（第24図9）、須恵器壺（第24図10・11）・甕（第25図5）がある。この他にも非クロロ土師器甕、ロクロ土師器甕、用途不明の上製品、瓦、鉄塊などがある。



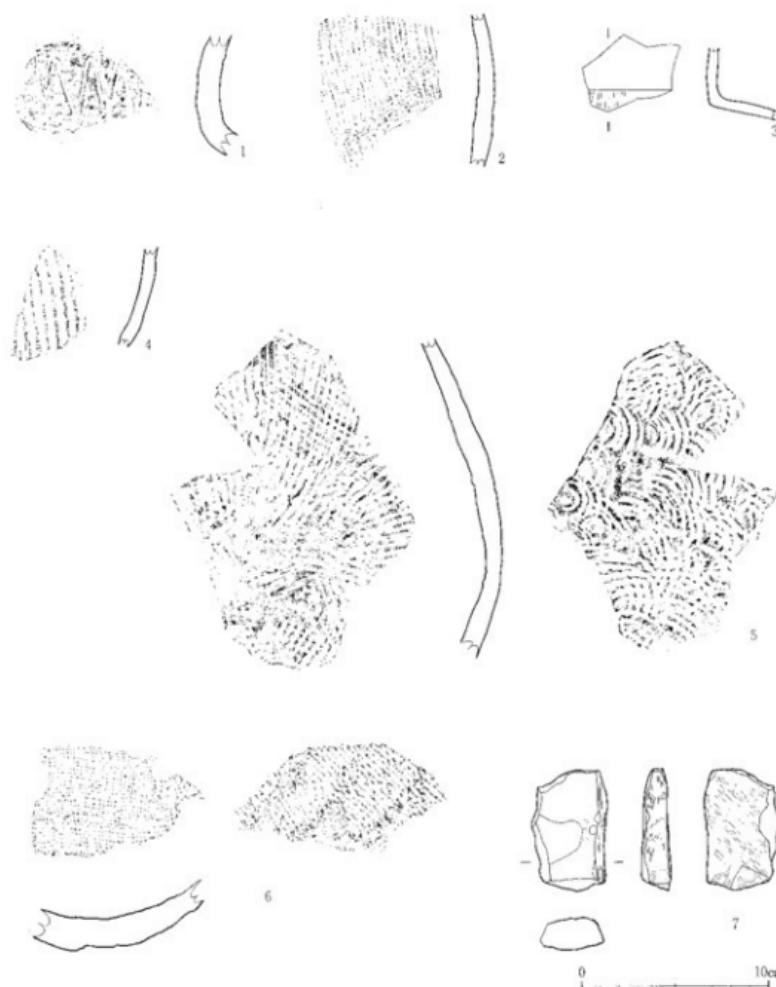
遺物名	埋蔵層	種別	基形	遺構・ゾリット	部位	外観概要	内面調整	口径	底径	高さ	備考	写真図版	分類
23-1	47	土師器	甕	10区	V1	口縁部：ハケメ、底部：ナガ	口縁部：ハケメ 底部：ナガ	123	40	134	手取川付近	41-3	甕 1-2
23-2	39	土師器	壺	11区	1	体部：ナゲ、ハケメ	体部：ナゲ	46				41-8	
23-3	44	土師器	壺	2区	V1	腹部：ハケメ→ヘラガキ下	山根部：ヘラナゲ	1340				41-5	壺 1
23-4	52	土師器	高壺	遺跡付箇	底部	底部：ヘラガキ	底部：ヘラガキ					41-9	
23-5	34	土師器	甕	1	体部下端：ハケメ	体部下端：ハケメ		73				41-7	

第23図 遺構外出土遺物（1）



第24図 遺構外出土遺物（2）

出土地名	遺物名	種別	形狀	通巻・グリット	単位	外周部型	内面構造	口径	底径	高さ	備考	当直年度	分類
24-1 32 十神跡 盆	2区	1	体部上層：ハケヌ									41-5	漆目
24-2 51 主持器？(小形) 道路北側	直線	直線型：ハラタケヌ										41-10	
24-3 43 上神跡 盆	2区	V1	腹底：ハラシガキ									41-4	漆目
24-4 37 佐治七番 盆	1	直線型：直角付テグ				ロクロナダ	(190)	50	38			43-3	
24-5 38 土師器 盆	1	直線型：直角付テグ				浅型：直角付テグ	(452)				底部：斜削直切り	42-8	
24-6 40 上神跡 盆	1	直線型：直角付テグ				浅型：直角付テグ	(452)				底部：斜削直切り	42-9	
24-7 45 土師器 盆	9区	V1	直線型：直角付テグ			浅型：直角付テグ	(70)				底部：斜削直切り	43-7	
24-8 62 上神跡 盆	1区	V	直線型：直角付テグ			浅型：直角付テグ	(90)				底部：斜削直切り	42-6	
24-9 53 上神跡 盆	通路北側	直線	体部：ロクロナダ			浅型：直角付テグ ハラシ (144)						43-10	
24-10 49 旗竿器 盆	通路	直線	直線型：ロクロナダ			ロクロナダ		64			底部：斜削直切り	43-4	
24-11 28 旗竿器 盆	道路北側	直線	直線型：ロクロナダ			ロクロナダ：一部カズ		54			底部：斜削直切り	43-5	
24-12 35 旗竿器 盆	1	直線型：直角付テグ				ロクロナダ		56			底部：斜削直切り	43-6	



第25図 遺構外出土遺物（3）

登録No.	登録No.	種別	断面	追跡・グリット	部位	外周測定	内周測定	口径	底径	高さ	備考	参考図版	分類
25-1	47	瓦器部	壺	2区	IV	縦断：ヨコヨカゲード	横断：ヨコヨカゲード				指標：放状沈殿	44-1	
25-2	51	瓦器部	壺	1区	I	体部：ヨコヨカゲード 口部：ヨコヨカゲード	横断：ヨコヨカゲード					44-5	
25-3	46	瓦器部	壺	9区	VI	縦断：ヨコヨカゲード	横断：ヨコヨカゲード					44-3	
25-4	33	瓦器部	壺		I	体部：ヨコヨカゲード	横断：ヨコヨカゲード					44-2	
25-5	54	瓦器部	壺	底部北側	IV	体部：ヨコヨカゲード 口部：ヨコヨカゲード	体部：ヨコヨカゲード 心内底付近で残存					44-5	
25-6	38	X	平丸		I	凸面：周辺2台	例説：舟貝					45-1	
登録No.	登録No.	種別	断面	追跡・グリット	部位	長さ×幅×厚さ(cm)	重量(g)	石材	使用状	備考	参考図版	分類	
25-7	48	鏡石	10区	VII	純丸(165)×(48)×(17)	51.5	泥質板岩岩、表面に微細凹凸	無				45-1	

## V. 考 察

### 1. 出土遺物について

遺物は1～5号住居跡、1号土坑の他、I・IV・V・VI層の基本層中からの出土やいくつかの表採品がある。これらは大きく古墳時代のものと、奈良・平安時代とみられる古代のものとに区別される。

#### (1) 古墳時代の土器

出土した上器の中で量的に最も多いのは、ロクロを使用しない土師器である。これらは2号住居跡の床面より一括して出土した他、1号住居跡、1号土坑、I・VI層中からの出土がある。復元可能なものも多いが、中には破片で全容を知り得ないものも数点含まれている。

#### 出土土器の分類

ここでは主に造構出土土器を中心に、器種ごとに器形、形態、器面の調整方法などの観点での分類を行った。但し調査区設定の制限上、個々の造構全体を確認し得なかったことから、以下に示す土器の器種構成、数量が造構における遺物本来の在り方とは言い難いものと言える。

#### [壺]

図示したものは4点である。

I類：体部上方に屈曲があり、口縁部が外傾するもの

底部は丸底で中央に窪みがある。

a類：中型で体部より僅かに口縁部に最大径があり、体部に張りがあるもの（図8-1）

外面調整は口縁部・体部とも一部ハケメの後ヘラミガキ、底部はヘラナデが施される。内面調整は口縁部・頭部はヘラミガキ、体部から底部はヘラナデの後一部にナデが施される。

b類：小型で口縁部より僅かに体部に最大径があるもの（図8-2）

口縁部は短く、口唇部は外反気味である。調整は内外面とも口縁部はヨコナデ、体部上半はハケメの後ヘラミガキ、下半はヘラケズリの後一部にナデが施される。

II類：体部中位に屈曲があり、口縁部が内弯気味に外傾するもの

口縁部に最大径がある塔状のものである。

a類：大型で底部が丸底で中央に窪みがあるもの（図8-4）

屈曲部より下方は張りがなく、底部へと続く。調整は内外面とも全面にヘラミガキ、外面の一部にハケメが施される。

b類：小型で底部が平底のもの（図8-3）

屈曲部より下方は張りがある。調整は内外面とも口縁部はヨコナデ、体部はハケメであるが、体部下端は外面がヘラケズリ、内面はナデが施される。朱彩の可能性がある。

### 〔高坏〕

図示したものは表抜品の1点のみである。(図23-4) 坏部下半のみの残存で、内弯気味に立上がり、体部に屈曲などは無いものとみられる。調整は内外面ともヘラミガキが施される。

### 〔器台〕

図示したものは1点のみである。(図6-4) 受部は緩やかに立上がり、内外面の稜線より上方は急に立上がる。脚部は上1/3は直立するが、下方は約45°の傾きで裾広がりとなり、端部は僅かに外反する。受部と脚部との間に径3mm程の細い貫通孔が一定幅で穿たれている。また脚部中位に3つの円窓がある。外面調整は全面にヘラミガキ、内面調整は受部はヘラミガキ、脚部はハケメの後上半の一部にナデが施される。

### 〔壺〕

図示したものは10点である。中には破片資料も含まれるため、ここでは2号住居跡出土の復元資料を中心みていく。

#### I類：小型・中型のもの

単純口縁で、直立或いは内弯気味に外傾する長頸のものである。

##### a類：体部がやや偏平で、丸底で中央に窪みがあるもの

###### 1-口縁部と体部に最大径があるもの(図8-5)

頸部を境に上半と下半の比率がほぼ同じの朱彩の土器である。外面調整は全面にハケメの後ヘラミガキ、内面調整は頸部より上はヘラミガキ、下はヘラナデが施される。朱彩はヘラミガキ部分に限り施される。

###### 2-体部に最大径があるもの(図8-8)

頸部より上が欠損しているが、他のI類に比べて頸部幅が狭く、体部高に対する頸部高の比率が小さなものと推定される。外面調整はヘラミガキ、内面調整はヘラナデが全面に施される。

##### b類：体部がやや長胴気味のもの

###### 1-丸底で中央に窪みがあるもの(図8-7)

外面調整はナデ、ハケメの後全面にヘラミガキが施される。内面調整は頸部より上はヘラミガキ、下はヘラナデが施される。

###### 2-平底で小型のもの(図8-6)

外面調整はハケメの後部分的にヘラミガキ、内面調整は頸部より上はヘラミガキ、下はヘラナデ、口縁部は内外面ヨコナデが施される。

その他のI類土器としては(図17-1)(図23-3)がある。前者は口縁径が大きいものである。後者は口縁部の立上がりが緩やかで、まっすぐに外傾するものである。この2点については頸部より上ののみの残存のため詳細は不明であるが、小・中型の壺とみられる。

## II類：大型のもの

大型の壺とみられるものは底部や口縁部の破片資料が4点出土しているにすぎず、全容を把握するのは難しい。(図6-5・6)は底部からの立上がりが緩やかなことから球胴の壺とみられる。前者は体部の最大径が30cm程度で、底部より3cm程の体部下端に粘土の合わせ目による明瞭な段がみられる。残存部での外面調整はハケメの後ナデ・ヘラケズリ、内面調整はヘラナデが施される。後者は体部の最大径が30cm以上とみられ、やはり底部より5cm程の部分に粘土の合わせ目による稜線がみられる。外面調整はハケメの後一部にナデ、内面調整はヘラナデが施される。(図24-1)は口縁部が欠損しており詳細は不明である。外面調整はハケメの後一部にナデ、内面調整はヘラナデが施される。(図24-3)は口縁部外面に粘土帯を貼付けた複合口縁で、緩やかに外反し、頸部長は短いものと推定される。

### 【集】

図示したものは11点である。出土した壺は全て小・中型のものである。口縁部は「く」の字状に折返し、外反気味に立上がる。最大径は全て体部中位付近にあるものとみられる。

#### I類：底部が平底のもの

##### a類：器高と体部最大径がほぼ同じなもの

###### 1 一体部中位に張りがあり、球形に近いもの (図6-2) (図9-3・4・5) (図11-1)

(図6-2)は上半部のみの残存である。口縁部は外反の度合いが大きく、外面では頸部屈曲部の上部さらに外側に折曲があるものである。調整は内外面ともヘラナデを施している。(図9-3)は頸部の屈曲が明瞭で、外面調整は体部上半はハケメ、下半は後ナデ、下端はヘラケズリが施され、内面調整は全面にヘラナデが施される。(図9-4)は口縁部の立上がりが急で、口唇部で外反するものである。外面調整はハケメの後一部ナデ、内面調整はヘラナデが施される。(図9-5)は口縁部でもう一段外側に折曲があるものである。外面調整はハケメの後ヘラナデ、内面調整はヘラナデが施される。(図11-1)は他のものに比べてやや小型のもので、口縁部は短く、屈曲部で若干の段があり、これを境に上部の器厚が厚くなっている。外面調整はナデ、内面調整はヘラナデの後一部にナデが施される。

###### 2 一体部中位の張りが少いもの (図23-1)

体部が張出さないため口縁径が最大径とほぼ同じで、頸部径も体部径に比べて大きなものになっている。頸部の屈曲は明瞭な稜ではなく、先端が急に狭まる口唇部となる。また底部外面の周縁に粘土帯を付加している。外面調整は口縁部も含め全面にハケメ、内面調整は口縁部はハケメ、体部はヘラナデが施される。

##### b類：体部最大径に対しても器高が大きいもの (図9-2)

体部中位に最大径があり、張りが小さく長胴気味で、口縁部は上端で外反する。外面調整は

ハケメと下半に一部ナデらしきもの、内面調整はヘラナデが施される。

c類：体部最大径に対して器高が大きいもの（図9-1）

小型の甕である。外面調整は体部下半はヘラナデがみられる他、口縁部までヘラミガキ、内面調整はヘラナデが施される。

II類：底部に台（脚）が付くとみられるもの

2点出土している。これらは体部以上の残存で脚部は欠損しているが、底部と脚部との剥離状況や底部の形状からみて台付の甕とみられる。

a類：外面調整がハケメを主体とするもの（図6-1）

口縁部は短く、まっすぐに外傾し、体部下部に張りのあるやや下膨らみのものである。体部下端は急に狭まり、脚部に続くとみられる。外面調整はハケメ、内面調整はヘラナデ、底部近くはナデが施される。

b類：外面調整がヘラナデを主体とするもの（図9-6）

体部のみみれば器高に対して体部最大径が明らかに大きいものである。外面調整はヘラナデが主体の一部ナデ、内面調整はヘラナデが施される。

#### [その他]

(23-2) は底部近くのみの残存で器種は不明だが、外面調整はナデの後ハケメ、内面調整はナデが施される小型の土器である。(24-2) は接地するとみられる底部は平坦で安定しており、立上がり部分はやや外反気味で、先端近くで欠損しているとみられるリング状の土器である。調整は底部はヘラケズリ、立上がり部分はハケメが施されるが、何に使用したかは不明である。

#### 出土土器の編年的位置

本県における弥生式土器に後続する上師器は古墳時代前期の塩釜式、中期の南小泉式以下、7つに型式区分されている。本書で提示している古墳時代の土器とは造構内外の出土を問わず、その器形などから塩釜式の特徴を持つものとみられ、古墳時代前期の上器群と考えられる。塩釜式資料の増加がみられるなか、丹羽氏は宮前遺跡の報文中で塩釜式を時間的差異をもった3つの段階に細分した。その後今熊野遺跡の報文中ではこれを「塩釜式土器の諸段階」として第II段階をさらに二分した上で関係遺跡出土の土器を段階分類している。また近年、次山氏は高环・小型丸底鉢・甕の製作技術に着目し、器種や形態の変遷から塩釜式から南小泉式への移行期を6段階に区分し、辻氏は東北南部の古墳出現期の様相として、他地域との対比のなか、従来の塩釜式に先行する新たな時期の設定を試みている。<sup>41)</sup>

以下では住居跡出土資料を中心に、器種・類型別に本県における遺跡出土の類例との比較検討を行った上で、セット関係を基本とした土器群の位置づけを考えていくこととする。比較要素としては器形・形態や細部の特徴を中心に、器種により器面調整にある程度の統一性が認め

られることから、特に外面調整についてもみていくこととする。また比較対象としては、全ての上器はそれ自体が前段階の影響を受けた所産であると同時に次段階へ影響を及ぼすものであることから、塩釜式各期を通した資料としている。

各住居跡における類別は以下の通りである。

1号住居跡 器台・壺II類・甕Ia1類・甕IIa類

2号住居跡 壺Ia類・壺Ib類・壺IIa類・壺IIb類

壺Ia1類・壺Ia2類・壺Ib1類・壺Ib2類

甕Ia1類・甕Ib類・甕Ic類・甕IIb類

#### 1号住居跡

器台は塩釜式独自のものと理解され、次形式の南小泉式には確認されていない器種である。1号住居跡出土のものはその特徴が受部から脚部への貫通孔と脚部の円窓にある。塩釜式においては貫通孔は次第に消滅し、円窓も少數化や消滅傾向が指摘されている。この器台は全体にヘラミガキが施され、貫通孔幅が3mm程と他の出土例に比べ極めて狭く、成形後に穿ったものとみられることから、これを孔消滅への退化傾向とみることも可能である。宮前遺跡49号住居跡出土1類は受部形状は異なるが、脚部が類似している。野田山遺跡4号住居跡出土のものは貫通孔幅はやや広いが器形は類似する。これらは貫通孔がみられない西野田遺跡4号住居跡出土のものに先行するものとされている。このことから本遺跡のものも西野田遺跡よりは古い段階のものと考えられる。野田山遺跡の器台には有段口縁の壺が共伴する。

壺II類の大型の壺は2号住居跡にはみられず、反対に1号住居跡には小・中型の壺はみられない。(図6-5・6)は外面の体部下端に段や稜をもつもので、これは製作過程で生じた特徴に加えて、塩釜式上器では口縁部の有段などと同様、装飾的意味合いを持つものと理解される。この特徴はいくつかの遺跡の壺、甕についてみられ、また鶴巻前遺跡では大型壺の体部下端に横位の隆線に画された上方に継位の隆線を数本配し装飾としたものが出土しており、他の出土遺物と共に塩釜式でも古い段階の特徴を有するものである。(図24-3)は複合口縁で内外面にヘラミガキが施される。VI層出土だが、出土地点からみて住居跡に伴う可能性が大きい。複合口縁や有段口縁を有する大型壺は塩釜式を通してみられ、次第に消滅しながらも南小泉式にも引継がれ、調整もヘラミガキ主体から甕同様ハケメなどに移行するものと考えられている。

#### 2号住居跡

床面からの一括資料として壺・壺・甕・台付甕がある。土師器の中でも器種が豊富で、その構成からも検討可能な塩釜式においては部分的調査なこともあります、いささか偏った在り方と言えるが、ここでは器種ごとにある程度まとまった出土がみられた。

壺Ia類はほぼ外面全体にヘラミガキが施され、器形、調整が類似するものとして留沼遺跡第

4地点出土IIb類や中田畠中遺跡3号住居出土AI1類がある。後者はナデ調整であるが、共伴遺物として複合口縁や、頸部に刻みを施した突帯をもつ壺、後にふれるが环IIb類に似た壺がある。また野田山遺跡10号住居跡出土II類はハケメではあるが器形は類似しており、調査されたものの中でも古い段階のものとされている。

环Ib類は口縁部が極端に短く、外面下半にヘラケズリを施し、やや器高はあるが、戸ノ内遺跡4号住居跡出土AII類、宮前遺跡49号住居出土鉢などに口縁部形態が類似する。また今泉遺跡5号土坑出土土器は口縁長はややあるが偏平な壺で、口縁部に棒状浮文を施した朱彩の大型の壺が共伴している。环Ib類は特に器形が類似するものが南小泉式において多く認められるところからも、時期が限定されず、ある程度時代幅をもった器形であるものとみられる。<sup>32</sup>环IIa類は环と称するにはかなり大型のものである。類例としては大橋遺跡2号住居跡出土IA1a類、色麻古墳群11号住居跡出土土器、遠見塚古墳第12トレンチ第I土器群、鶴ノ丸遺跡5号住居跡出土土器などがあるが、前二者は内外面ともヘラミガキが施される。色麻古墳群、遠見塚古墳出土のものは大型で、後者は有段口縁の大型の壺が共伴している。また器種は異なるが、大橋遺跡1号住居跡、戸ノ内遺跡4号住居跡・方形周溝墓、宮前遺跡53号住居跡出土の高環の环部に限りみれば、小振りではあるが体部中位の内外面に強い屈曲、稜をもち内湾気味に立上がり、环IIa類にかなり類似するもので、环との関連性を示す資料といえる。

环IIb類は外面調整がハケメとヘラケズリの小型土器とも呼べるものである。類例としては宮前遺跡27号住居跡出土土器、山前遺跡大溝出土土器、清水遺跡IV層出土I類、野田山遺跡2号住居跡出土I類、中田畠中遺跡3号住居跡出土AII類壺、安久東遺跡4号住居跡出土の壺とされるものなどがある。前二者は外面にハケメやヘラケズリが施され、IIb類同様最大径に対する器高の比率が大きく、他はヘラミガキでやや偏平のものである。これら以外にも鶴ノ丸遺跡、六反田遺跡などにやや偏平ではあるが小型のものがいくつかみられる。

壺I類は小・中型の壺で、各々器形においては異なりをみせるが、外面調整がハケメの後全面にヘラミガキが施される点で共通している。丹羽氏は塩釜式の小・中型の壺は変化が乏しいながらも、第I段階のものは頸部で強くすぼまり、肩や全体に張りがあり、既面調整は丁寧なヘラミガキが施されるが、後に張りを失い、ヘラミガキは簡略化するとしている。

壺Ia1・Ib1類に類似するのは鶴ノ丸遺跡6号住居跡出土B2類、山前遺跡大溝出土土器、留沼遺跡竪穴遺構出土III類などがある。しかしこれらはあくまでも全体形のわかるもので、この他にも口縁部のみの資料など多くの類例があるものと考えられる。NO.9は朱彩で単位の極めて細いヘラミガキを入念に施している特異なものである。

壺Ia2類は他のI類に比べて頸部が狭いのが特徴だが、口縁部が欠損し詳細は不明である。

壺Ib2類は小型で長胴を呈し、類例は今熊野遺跡15号住居跡土器があるが、口縁部がやや短

いもので、波状口縁の台付甕が共伴している。

甕Ia1類は中型の甕で、器高と体部最大径の比率がほぼ同じで体部に張りがあり、外面調整は主にハケメ、或いは後にヘラナデや一部ナデが施される。類似するのは大橋遺跡1号住居跡出土I B2bi類、色麻古墳群11号住居跡出土上土器、宮前遺跡38・49号住居跡出土1a類の他いくつかの遺跡にみられる。まとまった資料は少く、留沼遺跡出土の甕の多くは全体的にやや長胴で調整はヘラケズリが主体、田道町遺跡A地点で塙釜式とされるものはハケメとヘラケズリとなっているが、宮前遺跡、色麻古墳群住居跡出土のものは本遺跡同様ハケメを主体としている。また野田山遺跡10・11・19号住居跡出土の甕はハケメを主体に体部下半にヘラミガキを施したもののが多く出土している。留沼遺跡とそう時期差が無いと考えられている西野田遺跡出土の甕はハケメとヘラナデが施されており、第Ⅰ段階ではハケメが主体であるのが第Ⅲ段階ではそれがヘラナデに変化するという中では、西野田遺跡の器面調整は地域性を示すものとの指摘がある。<sup>45)</sup> NO.10・21は口縁部を体部に取付ける際に粘土痕跡を故意に残したか或いは口縁部外面に粘土を貼付けて粘土痕跡を残すもので、口縁部がやや厚みをもつものもあり、この特徴はI b類、IIa類にもみられる。これは口縁部の肥厚と表現される大橋遺跡I B2類や戸ノ内遺跡方形周溝墓出土A I b類などにもみられ、並に比べ変化の少ない甕口縁部の一つの特徴といえる。

甕Ia2類は造構出土ではないが、体部に張りが無い小型の甕で、口縁部にハケメを残し、他のものと様相を異にする。器形からみれば野田山遺跡19号住居跡出土I c類、清水遺跡IV層出土第Ⅰ群土器に類似品はあるが、資料が少なく詳細は不明である。

甕Ib類はこれ一点のみで、Ia類に比べて明らかに長胴タイプの甕である。甕の変遷としては壺同様に長胴化が進み、南小泉式に引継がれることからみれば、塙釜式の中でも新しい要素を持ったものともいえるが、明言はできない。頸部に粘土痕跡を残している。

甕Ic類は器高が低く、頸部があまり狭まらず、环の要素を持ったものである。外面調整はヘラミガキを主体とし、体部下端にヘラナデを施す。色麻古墳群11号住居跡出土の壺、留沼遺跡第3溝出土IV類などが類似し、調整手法から环との関連でみると必要があるものと考えられる。

甕II類はいわゆる台付甕で、器台同様この時期に特徴的な器種で、南小泉式での報告はなされていない。台付甕は塙釜式の中でも各段階に出土例があるが、他の器種に比べ報告例は少なく、その器種変遷を台付甕固有の特徴のみで理解するのは難しいといえる。

甕IIa類は体部がやや下膨らみて、外側調整がハケメがみられ、頸部に粘土痕跡を残している。今泉城跡19号土坑出土土器、岩切鴻ノ巣遺跡出土BIII類、田道町遺跡A地点9号住居跡出土土器、六反田遺跡4号住居跡出土土器などはいづれもハケメが施されるが、器形が異なるものである。田道町遺跡ではヘラケズリのものとヘラケズリの後ヘラナデを施すやや小型の台付甕と共に円柱状に直立し裾が急に広がるやや新しい要素を持つ高环の脚部が共伴している。これ

らの口縁部外面にも粘土の貼付けがみられ、これに伴う痕跡を残している。六反田遺跡のものは口縁部をつまみ出す特徴あるものとして注目している。

壺IIb類はIIa類よりやや大きめで外面調整がヘラナデやナデのものである。体部下部に二次的に熱を受け赤色化し、一部に煤が付着している。器形が類似するものは野田山遺跡10号住居跡出土II類があり、脚部がハケメ、体部がヘラケズリが施されるもので、これらは塩釜式でも古い段階に位置付けられている。今熊野遺跡15号住居跡出土上器はヘラケズリを施す波状口縁のもので、IIA段階に位置付けられている。中田畠中遺跡SX 2出土上器は脚部破片であるが、ハケメの後ヘラケズリが施されるものである。しかしながら田道町遺跡の在り方を見る限り、器面調整の方法による遺跡或いは遺構間での時期差を認めることは難しい。また器形、器面調整における甕との比較では、台付甕の使用目的からみて、必ずしも両者の調整方法に強い類似性を求めるることはできないものと考えられる。

ここで器種別の特徴をまとめてみると、甕は全体にヘラミガキを施すが、丁寧とはいひ難く、器形は古い要素を持つものや後の時期に類例が増すものなどがある。器台は壇部の形態があまり例を見ないが、接続部から聞く古いタイプのものとは異なり、貫通孔も形式化し残ったものとの印象を受ける。甕は小・中型は外面調整にヘラミガキは施されるがやや粗雑で、器形から時期を判断することは難しいが、朱彩のものについては器形、調整面からやや古い要素を持つものといえる。大型についてはいづれも器形は不明で、複合口縁と体部下端の段に特徴を持つが、器面調整にハケメやヘラケズリを多く残し、ヘラミガキはあまり見当たらず、詳細は不明である。甕は形状からの時期判断は難しく、長胴形のものも含まれるためある程度新しい要素を含んだものともいえるが1点のみで、器面調整においては県南部に位置する西野田遺跡、宮前遺跡らの新しい時期のものと傾向性は似るといえ、器形は異なり、口縁部特徴にやや古い要素を残していることからこれらに先行するものとみられる。

以上、塩釜式土器について器種ごとの分類と他遺跡での類例を求めてみたが、前述のように土器の時期決定には不可欠といえる造構内でのセット関係、または遺跡内での共伴関係を基本とした検討を行うにあたって多少の資料不足は否めないが、個々の遺物において他に強い類似性をみせるものもあり、調整方法の傾向の比較も可能であった。残念ながら本遺跡も含め器種が充実している例は少く、具体的なセット例などは提示できなかったが、これらの土器群は本県の塩釜式の中でも古段階とされる大橋、戸ノ内遺跡出土土器などの器種のいくつかに同様の特徴が求められると同時に、その流れを受継ぐものといえ、反対に西野田、留沼遺跡など新しいとされる土器群に先行するものとみられる。次山氏の示す甕における特徴からみたならば古段階の様相をみせるものともいえるか<sup>註4</sup>、他器種とのセット全体からみるならそれらの特徴は前段階の特徴を色濃く残したものと理解され、丹羽氏の編年でいう第II段階におおむね収ま

るものと考えられる。

ここ数年、市内だけをみても沖積部を中心に古墳時代前期とされる遺構・遺物の発見があり、県内各地でも多くの住居跡や土器などの発見が相次いでいる<sup>25</sup>。近年、古墳時代前期土器群の細分や位置づけが行われるなか、今後は本遺跡の土器群も含め、その縦年の位置のみならず、周溝墓や古墳からの出土遺物との比較や、集落などにおける遺構との関わりの中でより詳細な検討がなされなければならないものと思われる。

## (2) 古代の土器

古代の土器としたものにはロクロ使用・未使用の土師器、赤焼土器、須恵器がある。これらは3・4・5号住居跡の堆積土中の他、I・IV・V・VI層出土や表採品である。

3号a住居跡堆積土出土の須恵器(図11-2)は碗状を呈するが詳細は不明である。4号住居跡堆積土と床面確認の土坑2からはロクロ土師器甕が出土した。(図13-4)は外面調整が体部下端がヘラケズリ、内面はハケメを施している。口縁部資料は別個体で(13-2・3)、いづれも内面にハケメを施している。5号住居跡の煙道堆積土からは非ロクロ土師器甕(図15-3)とロクロ土師器甕(図15-2)が出土した。前者は残存部での外面調整が手持ちヘラケズリ、内面は黒色処理の後ヘラミガキを施している。後者は内面に黒色処理の後ヘラミガキで、底部は切離しは不明で手持ちヘラケズリが施されている。ピットからは底部切離しは不明で回転ヘラケズリ調整の須恵器甕(図15-1)が出土した。基本層中出土の土器としてはI層はロクロ土師器甕(図24-5・6)、赤焼土器(図24-4)、底部が回転糸切りの後無調整の須恵器甕(図24-12)、外縁が平行叩き目の須恵器甕(図25-2・4)、IV層は頸部に波状沈線を施した須恵器甕(図25-1)、V層はロクロ土師器甕(図24-8)、VI層はロクロ土師器甕(図24-7)、外縁部下に平行叩き目の須恵器甕(図25-3)がある。5号住居跡出土のロクロを使用しない土師器は国分寺下層式、その他のロクロ土師器については全て表杉ノ入式のものとみられる。須恵器については小破片で詳細は不明であるが、甕底部の切離しが全て回転糸切りの後無調整であることから、多くの土師器同様平安時代のものとみられる。

## 2. 遺構の年代

### [住居跡]

6軒確認され、相互の直接的重複関係は無かったが出土遺物によって時期の異なることがわかった。1・2号住居跡は古墳時代前期のもので、2号住居跡は床面出土土器が時期決定資料になったのに対し、1号住居跡の土器は堆積土中の出土で、残念ながらその状況が住居機能停止時における土器の廃棄状況とは必ずしも言い難いものであった。両者の遺物の比較でも明らかな時期差が認められる状況はない以上、1号住居跡における遺物の在り方を考える上では、同時存在と共に機能時期の若干のズレによる2号住居跡遺物の他方への廃棄の可能性も考える

必要性がある。またこれらの住居跡は他がみな真北より東を向くのに対して、西へ10°以上向くことで共通し、台付甕の出土からもカマドは存在しなかったものと考えられる。3～6号住居跡は出土遺物や遺構の掘込み層からみて、下限が10世紀前半頃とする平安時代のものと考えられる。これらについては床面出土など確実に遺構に伴うと判断される上器の出土は皆無であったが、堆積土中や床面確認土坑、ピットに加え、おそらくは後になんらかの原因で動いたとみられる基本層中の遺物をみれば古墳時代のもの以外は全て平安時代に属するものである。住居跡方向もほぼ同じで、共存或いは多少の時期差をもった住居跡群と考えることが可能である。カマドは5号住居跡でのみ確認された他、4号住居跡からは先端が丸みをもった四角錐状の上製品が出土し、おそらくはカマド内の支脚に使用されたものと考えられる。しかしながら調査区の制限上、全ての住居跡はその一部のみの確認であったため、住居内に想定される諸施設の有無や形態、配置状況などについて言及できるものではなかった。

#### 〔土坑〕

1基のみの確認で、堆積土中ではあるが底面近くで頭部にヘラミガキ調整を施した塙釜式の壺が出土したことから、1・2号住居跡同様古墳時代前期のものである可能性が強い。

#### 〔溝跡・溝状遺構〕

1号溝跡の確認面は唯一VI層上面で、堆積土中には10世紀前半に降下したとみられる灰白色火山灰が堆積していた。後の流入による二次堆積の可能性もあるが、1号溝跡は今回確認した遺構中では最も新しく、その下限については10世紀前半を大きく下ることはないと考えられる。2号溝跡は出土遺物は無かったが、P8を介在し重複する6号住居跡より新しく、やはり平安時代のものと考えられる。3号溝跡は4号住居跡下に確認されたが、確認面であるVI層の形成時期が不明なため、平安時代かそれ以前のものと考えられる。溝状遺構は小規模で同程度の溝が平行・直行して走るもので、類似するものは多くの遺跡において烟跡の可能性が指摘されている。ここでは各々の間隔にばらつきはあるが、何かしら規格性をもった配列を感じさせる。しかしながら溝堆積土と上層のVI層との間に特に関連性が認められなかつたことも含め、積極的に烟跡と認識するには至らなかった。

以上のことから、本遺跡は西に位置する戸ノ内遺跡にはやや遅れるが、ほぼ同時期とみられる中田畠中遺跡などと共に古墳時代初め頃から人々の営みが開始され、それはしばらくの間途絶えた可能性も考えられるが、平安時代には再び活気を帯び、それも10世紀前半頃までには居住域としての性格は薄れていくものと考えられる。そこには本遺跡の土層からも推察できるように、北に位置する名取川の度重なる氾濫による多量の土砂の堆積が、各時代を通して人の営みに大きな影響を与えたことは容易に想像できるものである。また今回確認されなかつたが、VI層より上層については居住のみならず生産に関わる遺構存在の可能性も十分考えられ、今回

確認した遺構の広がりと共に、より多面的な遺跡の性格解明が必要と考えられる。

- 註1 尾氏は当該時期をⅠ～Ⅲ期8段階に時期別に分し、後末「塙笠式」とされるものはⅡ・Ⅲ期に相当し、Ⅰ期はこれらに先行する時期として位置付けている。
- 註2 六反田遺跡においても4号住居跡出土坪Cは南小泉式期の坪に類似点が見出だされるものとされ、ⅡBからⅢ段階に位置付けられている。
- 註3 丹羽氏は塙笠式土器の地域性として西野田遺跡・宮前遺跡と留添遺跡の要の比較において網部が長削化する点から時期的共通性を示したうえで、両者を含む第Ⅲ段階では答形網部・器底圓窪において地域的相違を指摘できるとしている。
- 註4 次山氏は要の網部の特徴について、口縁部の肥厚、口縁部輪積痕跡やハケメの残存、底部の輪台は1・2段階の特徴とし、これらはそれぞれ丹羽編年のⅠ・Ⅱ段階前半に对应するとしている。
- 註5 平成4・5年度『宮城県遺跡調査成果発表会』資料、ほか各現地説明会資料などによる。

## VI. まとめ

1. 昭和北遺跡は名取川南岸の自然堤防上に立地し、調査地点は遺跡範囲の北端に位置する。発掘調査は市道拡幅工事に伴う事前調査として行われた。
2. 本遺跡は出土土器からみて古墳時代から平安時代にかけての複合遺跡で、確認された遺構は古墳時代前期の住居跡2軒、土坑1基や、平安時代とみられる住居跡4軒、溝跡3条のほか溝状遺構などがあり、これらは10世紀前半頃を下限としている。
3. 2号住居跡出土の土師器は床面からの一括資料で、その器形や形態などから古墳時代前期中頃の土器群と考えられる。
4. 調査区周辺の遺物の散布状況からみて、各時期の遺構は広範囲にわたり存在すると思われる。また今回は確認できなかったが、基本層の状況から推察すると、確認面が異なる、より新しい時代の遺構の存在も推定される。

### 引用・参考文献

- 青沼一民・長島栄一 1983 「中山畠中遺跡」『仙台市文化財調査報告書第53集』
- 岩淵康治・田中則和 1976 「安久東遺跡」『仙台市文化財調査報告書第10集』
- 氏家和典 1957 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 氏家和典 1972 「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号 北奥古代文化研究会
- 恵美昌之 1978 「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書第6集』
- 太田昭夫 1980 「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書第71集』
- 大友 透 1993 「鶴巻前遺跡」『名取市文化財調査報告書第31集』
- 小山田正男 1985 「二本松遺跡」『宮城県文化財調査報告書第112集』
- 樋村友延・国府田良樹 1982 「内宿遺跡」「いわき市埋蔵文化財調査報告第7冊』
- 加藤道男 1980 「東館遺跡」『宮城県文化財調査報告書第65集』
- 小井川和夫・古川一明・須田良平・吾妻俊典 1992 「野田山遺跡」『宮城県文化財調査報告書第145集』
- 後藤秀一・岩見和泰・金子勇一 1991 「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第148集』
- 斎藤吉弘 1979 「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書第59集』
- 佐藤甲二 1984 「後河原遺跡」『仙台市文化財調査報告書第71集』
- 佐藤甲二 1985 「中田畠中遺跡 第二次」『仙台市文化財調査報告書第78集』
- 佐藤 洋 1983 「今泉城跡」『仙台市文化財調査報告書第58集』

- 佐藤 洋 1987 「六反田遺跡 III」『仙台市文化財調査報告書第102集』
- 篠原信彦他 1980 「今泉城跡」『仙台市文化財調査報告書第24集』
- 高橋勝也 1985 「伊古田遺跡」『仙台市文化財調査報告書第82集』
- 高橋守克・阿部 恵 1986 「須恵櫛塚遺跡」『河南町文化財調査報告書第1集』
- 田中 敏 1987 「福島県内における古墳時代前期土器群の様相について」『福島県立博物館紀要』第1号
- 次山 淳 1992 「埴釜式土器の変遷とその位置づけ」『究底』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
- 辻 秀人 1993 「東北南部の古墳出現期の様相」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会
- 手塚 均 1980 「留沼遺跡」『宮城県文化財調査報告書第65集』
- 手塚 均 1981 「鶴ノ丸遺跡」『宮城県文化財調査報告書第81集』
- 土岐山武 1980 「安久東遺跡」『宮城県文化財調査報告書第72集』
- 丹羽 茂・柳田俊雄・阿部恵 1974 「西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書第35集』
- 丹羽 茂・小野寺祥一郎・阿部博志 1975 「清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書第77集』
- 丹羽 茂 1983 「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書第96集』
- 丹羽 茂 1985 「今熊野遺跡」『宮城県文化財調査報告書第 104集』
- 芳賀英実・佐々木淳・岡 道夫 1992 「田道町遺跡 A地点」『石巻市文化財調査報告書第 4集』
- 古川一明 1983 「色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書第95集』
- 平凡社 1987 「宮城県の地名」「日本地名体系第四卷」
- 松本秀明 1984 「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動」『地理学評論第 57卷10号』
- 宮城県文化財保護課 1976 「山前遺跡」小牛田町教育委員会
- 結城慎一・上藤哲司 1979 「遠見塚古墳」『仙台市文化財調査報告書第15集』
- 渡部弘美・主浜光朗 1984 「戸ノ内遺跡」『仙台市文化財調査報告書第70集』
- 渡部弘美 1994 「今泉遺跡」『仙台市文化財調査報告書第 185集』

写 真 冈 版



写真1 昭和北遺跡空中写真（昭和63年、国土地理院による）2万分の1



写真2 調査前状況（西から）

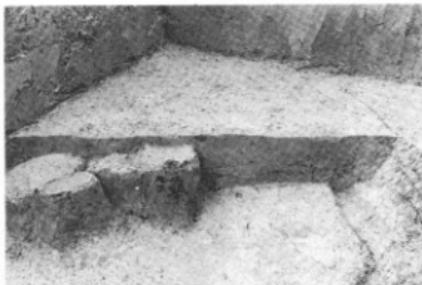


写真3 SI I 住居跡断面状況（東から）



写真4 SI I 住居跡遺物出土状況（東から）



写真5 SI I 住居跡完掘状況（東から）



写真6 SI 2 住居跡床面遺物出土状況（東から）



写真7 SI 2 住居跡断面状況（東から）



写真8 SI 2 住居跡掘り方完掘状況（東から）

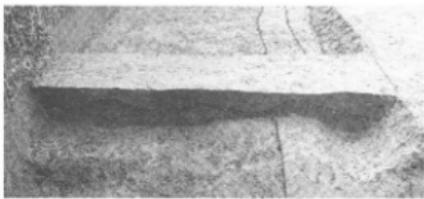


写真9 SI 3 a 住居跡断面状況（東から）

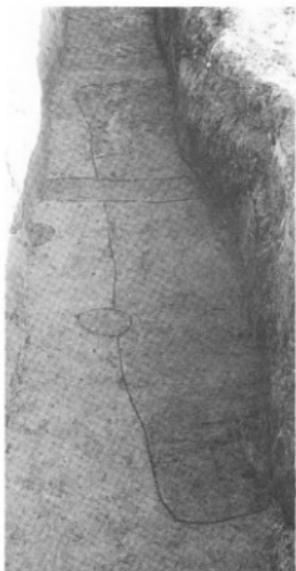


写真10 SI 3 a 住居跡確認状況  
(西から)

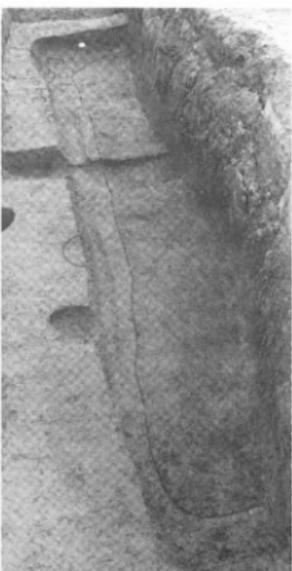


写真11 SI 3 a 住居跡完掘状況  
(西から)

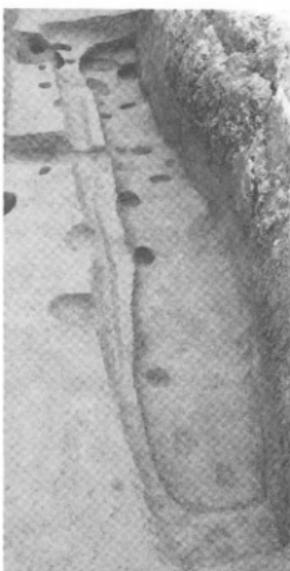


写真12 SI 3 b 住居跡完掘状況  
(西から)



写真13 SI 4 住居跡確認状況（西から）



写真14 SI 4 住居跡床面状況（西から）

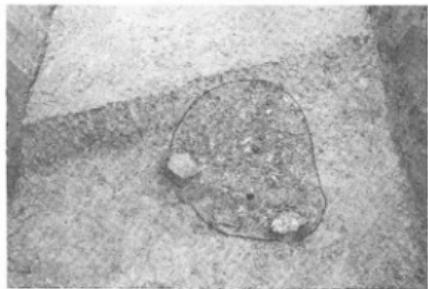


写真15 SI 4 住居跡土坑 2 確認状況（西から）



写真16 SI 4 住居跡土坑 2 断面状況（北西から）



写真17 SI 5 住居跡確認状況（西から）

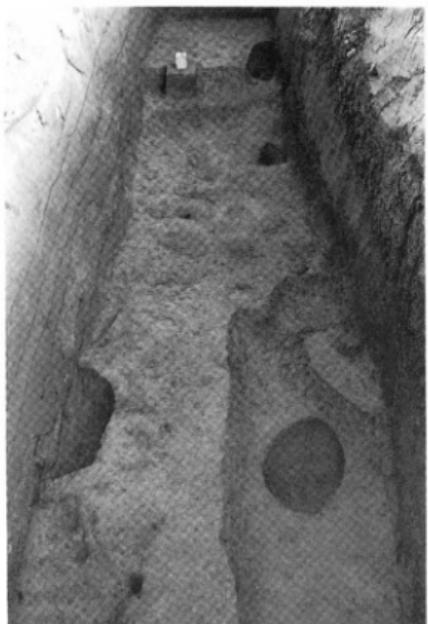


写真18 SI 5 住居跡完掘状況（西から）



写真19 SI 5 住居跡煙道部断面状況（北から）



写真20 SI 5 住居跡煙道部完掘状況（西から）

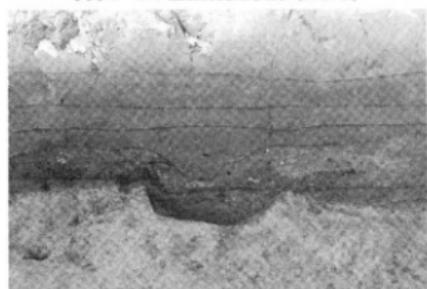


写真21 SI 5 住居跡断面状況（南から）



写真22 SI 6 住居跡断面状況（北から）



写真23 SI 6 住居跡完掘状況（東から）



写真24 SK I 土坑完掘状況（東から）

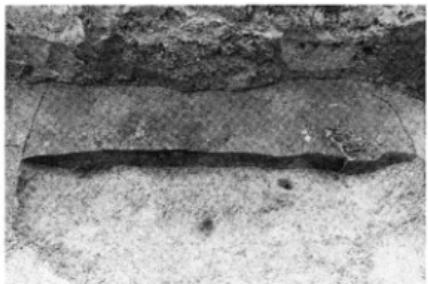


写真25 SK I 土坑断面状況（北から）



写真26 SD I 溝跡完掘状況（南から）



写真27 SD I 溝跡断面状況（南から）



写真28 SD 2 溝跡確認状況（西から）



写真29 SD 2 溝跡断面状況（北から）



写真30 SD 3 溝跡断面状況（南から）

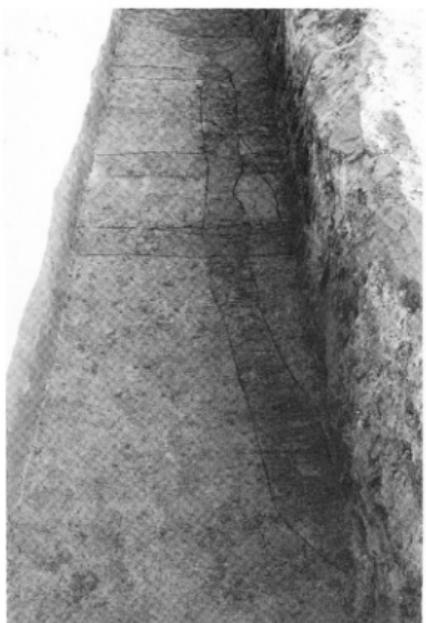


写真31 溝状造構①～④確認状況（西から）

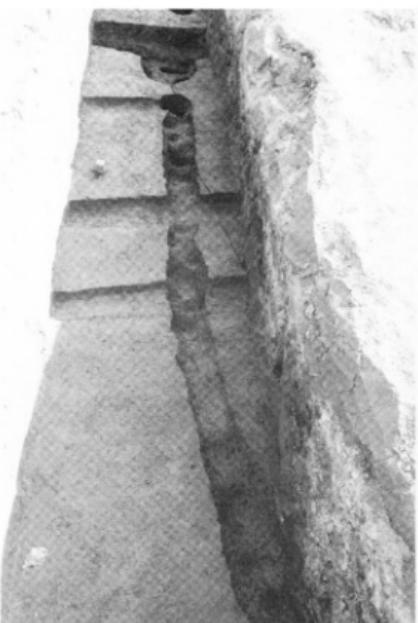


写真32 溝状造構①～④完掘状況（西から）



写真33 溝状造構⑤完掘状況（南から）



写真34 溝状造構②・③断面状況（北から）



写真35 溝状造構①断面状況（b-b'）（西から）



写真36 調査風景（東から）

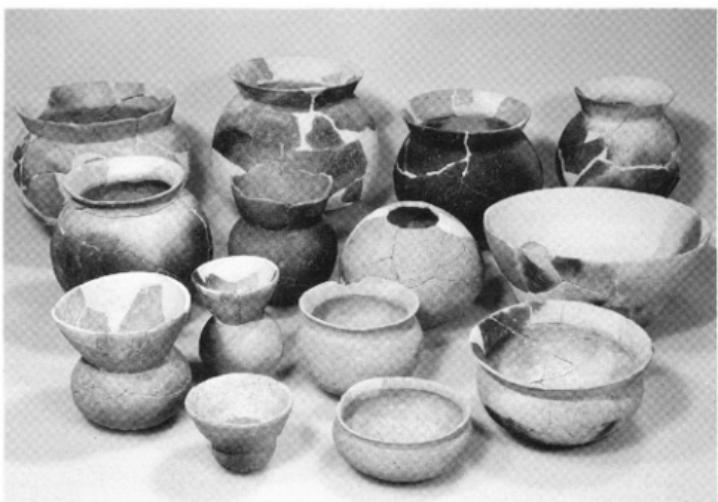
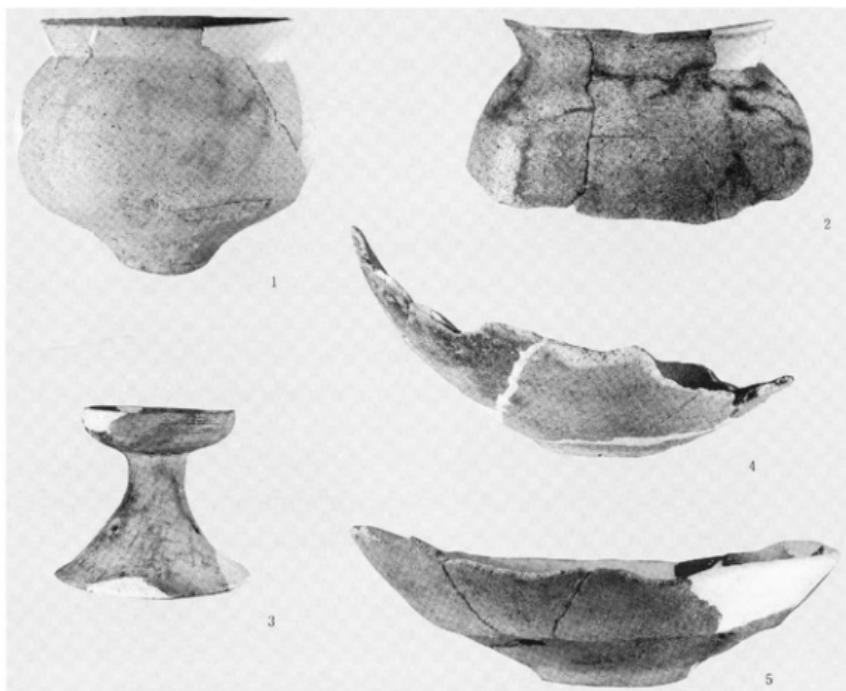
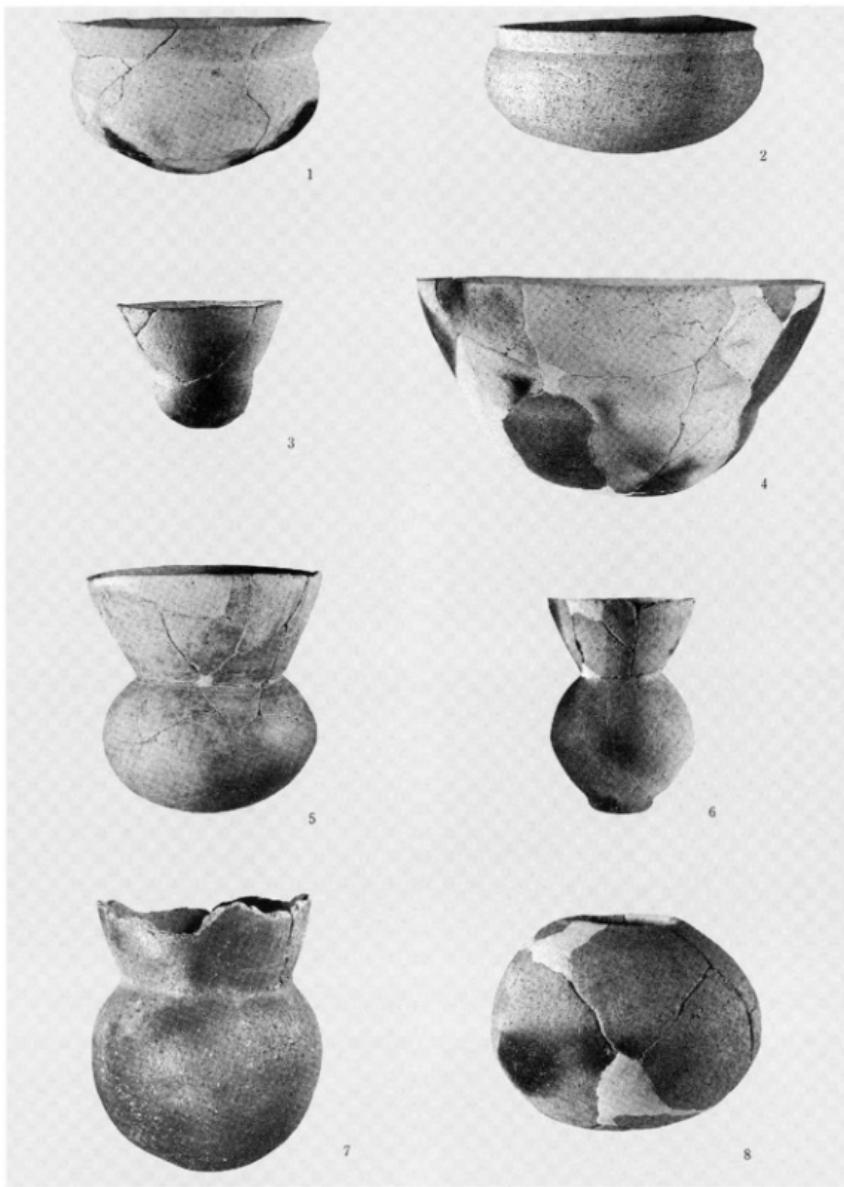


写真37 Si 2 住居跡出土土器



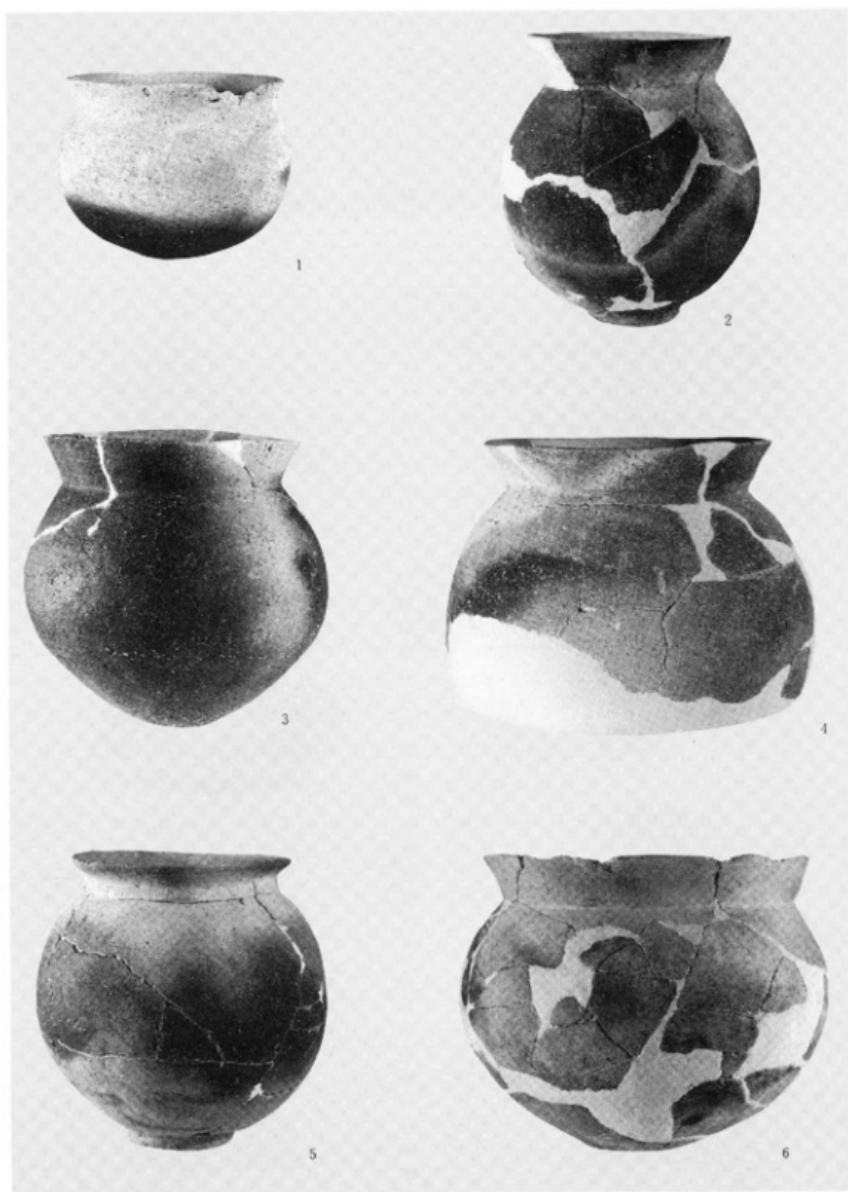
1. No.3 (図6-1) 2. No.6 (図6-2) 3. No.5 (図6-4) 4. No.1 (図6-6) 5. No.2 (図6-5)

写真38 Si 1 住居跡出土遺物、土器



1. No.8 (図8-1)      2. No.15 (図8-2)      3. No.13 (図8-3)      4. No.7 (8-4)  
5. No.9 (図8-5)      6. No.11 (図8-6)      7. No.16 (図8-7)      8. No.19 (図8-8)

写真39 SI2 住居跡出土遺物(1)、土師器

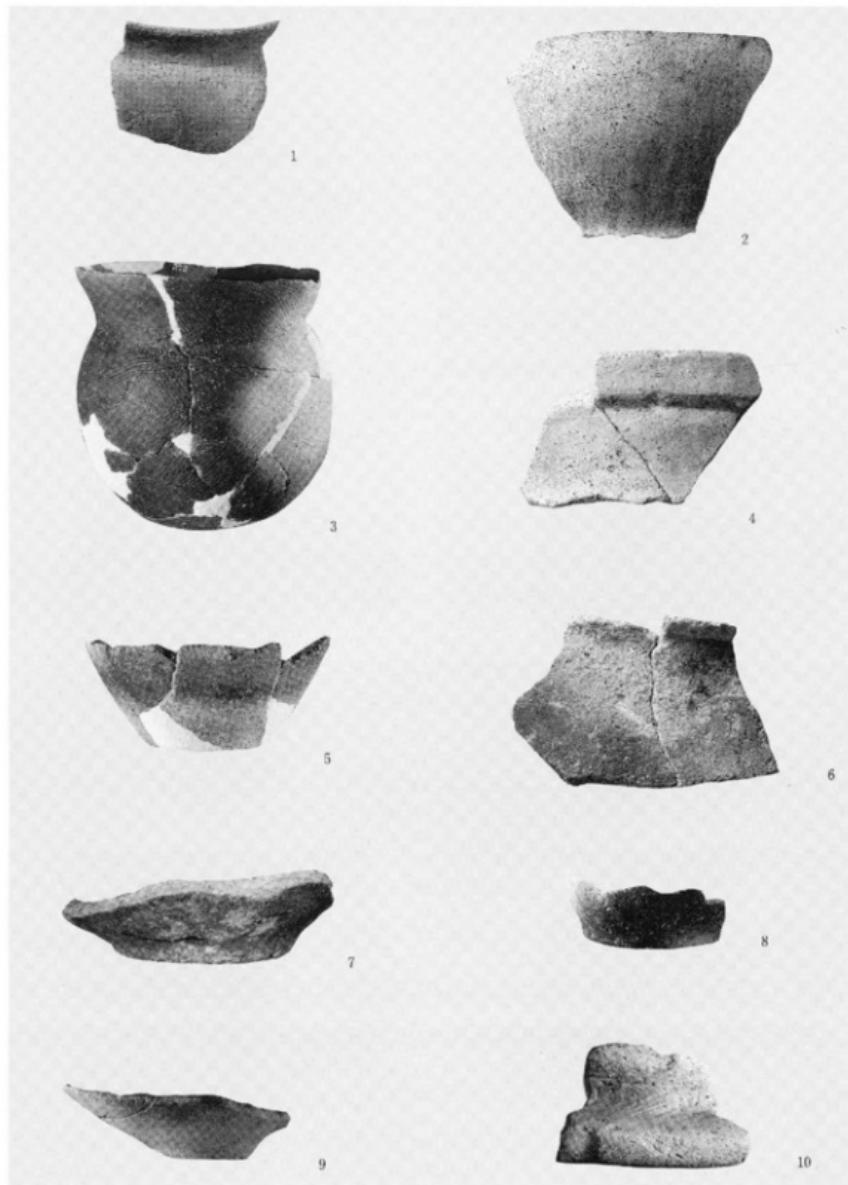


1. No.14 (図9-1)  
5. No.10 (図9-5)

2. No.17 (図9-2)  
6. No.12 (図9-6)

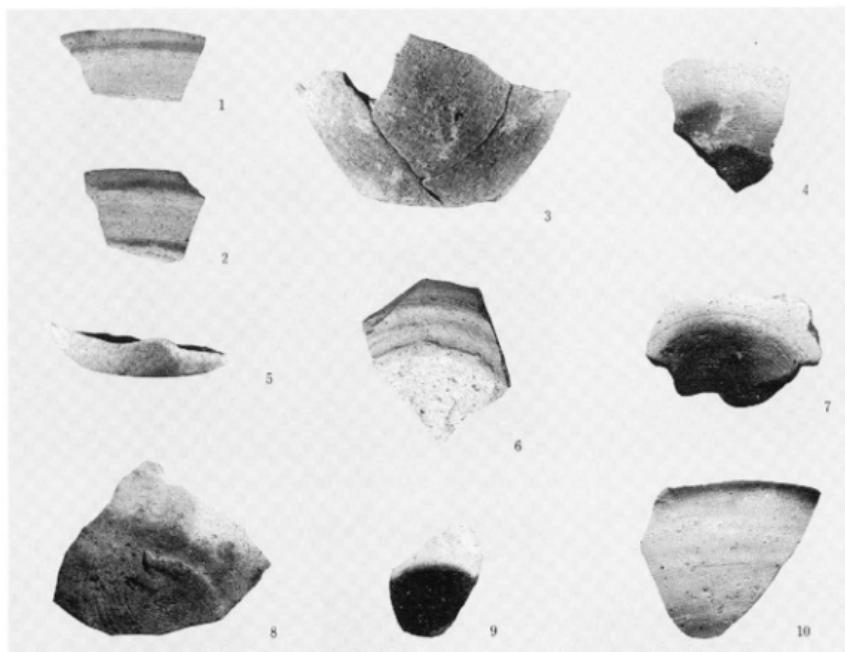
3. No.18 (図9-3) 4. No.20 (図9-4)

写真40 SI2住居跡出土遺物(2)、土器



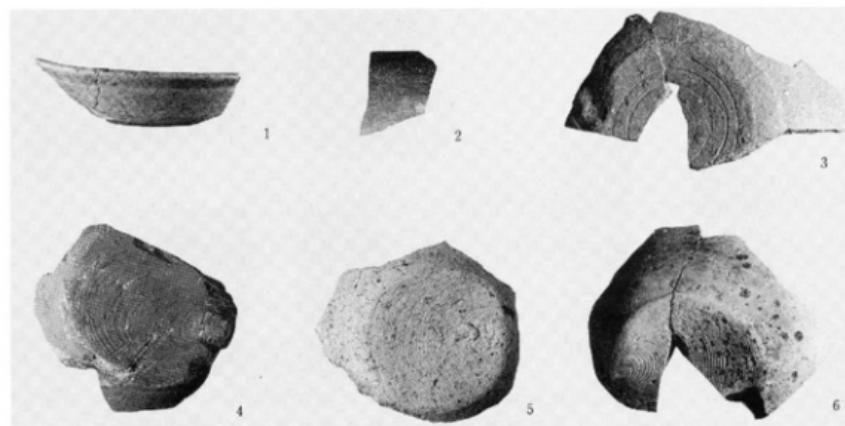
1. No.21 (図11-1)      2. No.30 (図17-1)      3. No.47 (図23-1)      4. No.43 (図24-3)  
 5. No.44 (図23-3)      6. No.32 (図24-1)      7. No.34 (図23-5)      8. No.39 (図23-2)  
 9. No.52 (図23-4)      10. No.51 (図24-2)

写真41 出土遺物（1）、土師器



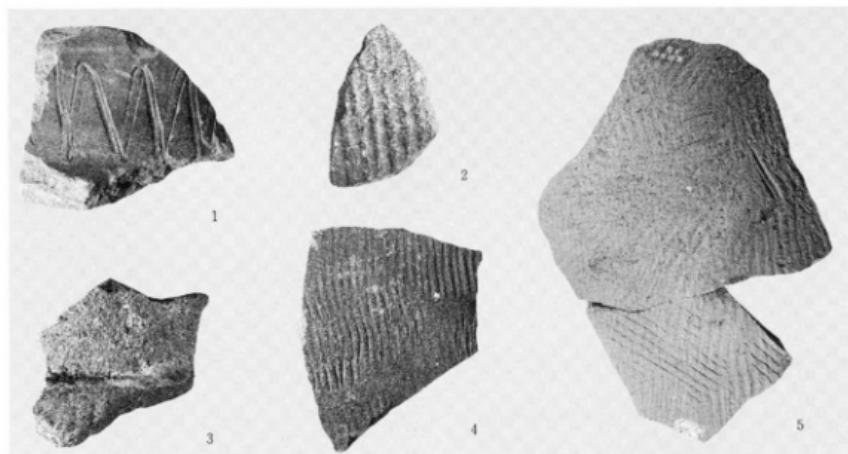
1. No.26 (図13-2)    2. No.24 (図13-3)    3. No.25 (図13-4)    4. No.27 (図15-3)  
 5. No.28 (図15-2)    6. No.42 (図24-8)    7. No.45 (図24-7)    8. No.38 (図24-5)  
 9. No.40 (図24-6)    10. No.53 (図24-9)

写真42 出土遺物 (2)、口クロ土師器



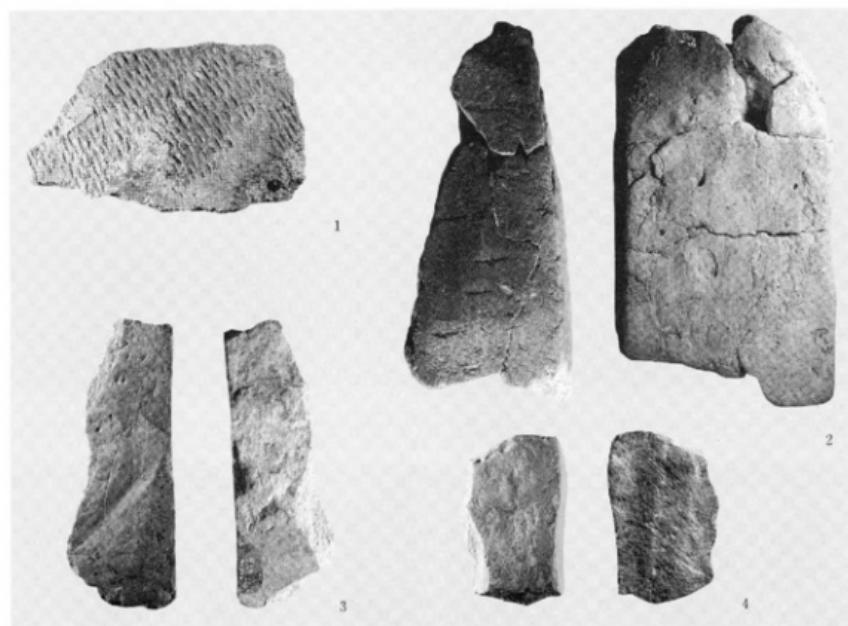
1. No.37 (図24-4)    2. No.22 (図11-2)    3. No.29 (図15-1)    4. No.49 (図24-10)  
 5. No.50 (図24-11)    6. No.35 (図24-12)

写真43 出土遺物 (3)、赤焼土器・須恵器



1. No.41 (図25-1)    2. No.33 (図25-4)    3. No.46 (図25-3)    4. No.31 (図25-2)  
5. No.54 (図25-5)

写真44 出土遺物 (4)、須恵器



1. No.36 (図25-6)    2. No.23 (図13-1)    3. No.4 (図6-3)    4. No.48 (図25-7)

写真45 出土遺物 (5)、瓦・土製品・石製品

## 文化財課職員録

課長 白鳥良一

### 管理係

係長 菅原澄雄  
主任 村上道子  
主事 福井健司  
主事 庄司厚江  
主事 齋藤栄治江  
主事 佐藤壽江

### 調査第一係

係長 田中則和  
主任 木村浩二  
教諭 佐藤好一  
主任 吉岡泰平  
主任 金森安孝  
教諭 小川淳一  
主事 工藤哲  
主事 浜野光彦  
主事 斎藤彦彦  
教諭 稲葉俊一  
教諭 菅原裕  
主事 渡部紀  
教諭 川名秀一  
教諭 熊谷裕

### 調査第二係

係長 結城慎一  
主任 原田信彦  
教諭 太田昭夫  
主任 佐藤甲洋  
主任 佐藤弘二  
主任 渡部信一郎  
主任 井格洋  
主任 荒中亮  
主任 平岡輔  
主任 五十嵐康洋  
教諭 特志洋  
教諭 成澤謙  
教諭 竹田幸  
主事 佐藤淳

仙台市文化財調査報告書第186集

昭和北遺跡

－発掘調査報告書－

1994年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町二丁目7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 針生印刷株式会社

仙台市若林区六丁の貝西町1-38

Tel 288-5011

